

研究ノート

南フランス・ガール県北部のロマネスク聖堂 (2)

－アレスの東からオート＝ヴァレー＝ドゥ＝ラ＝セーズまで－

中川久嗣

Les Églises Romanes dans le Nord du Département du Gard (2) : la région est d'Alès et la Haute Vallée de la Cèze

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les chapelles, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent au nord du département du Gard, surtout la région est d'Alès et la Haute Vallée de la Cèze. Ce pays correspond approximativement à l'ouest de l'ancien diocèse d'Uzès, et aujourd'hui à l'arrondissement d'Alès. Il s'agit la porte sud des Cévennes. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿では南フランスのガール県北部の、アレスの東からガール県最北端のオート＝ヴァレー＝ドゥ＝ラ＝セーズにかけてのセヴェンヌの山間地に点在する中世のロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問・調査し考察を加える。

取り扱う聖堂は、ロマネスク期とは言っても厳密な時代の限定はせず、11・12 世紀のいわゆる盛期のロマネスク期を中心として、その前後の時代もゆるやかに含めたものである。聖堂全体がロマネスク期のものから、大なり小なりその時代の部分が残っているもの、建築様式がロマネスク様式をとどめているもの、そして現在では遺構となっているものなども含まれる。建築の一部分がロマネスク期のものとなると、その数は非常に多くなり、その全てを網羅することは難しい。結局はロマネスクの部分かどの程度残っているのかによるのであるが、その選択が多少とも恣意的なものにならざるを得ないことはあらかじめ断っておきたい。

聖堂の配列は、おおよそ現在の行政地域区分に準じて整理することとし、ガール県の県番号(30)、大まかな地域、そして自治体(Commune)の順で番号を付した(フランスの地方のコミューンはしばしば合併・再編が行われるので、最新のものには対応していないこともあり得る)。同一のコミューンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。

用語・訳語について。まず聖堂の名称については、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。教区教会については、いちいち名称に「教区」を付けることはしていない。カテドラル（司教座聖堂）は「大聖堂」と記した。「abbatiale」は通常「修道院付属教会」「修道院付属聖堂」などの訳語をあてるが、本稿では「修道院教会」とした。また「prieuré」についても、わが国では「小修道院」と訳すことが多いが、本稿では個別の名称を記す場合以外はそのまま「プリウレ」と記してある。「chapelle」は、聖堂内にあるものは「礼拝室」とした。なお身廊内部のベイは、西側から第1ベイ、第2ベイという順に数える。壁付きの方形柱（付け柱）は、英語の「ピラスター」ではなくフランス語のまま「ピラストル」（pilastre）としてある。また通常、身廊と内陣の間に架けられることが多い「arc triomphal」は「凱旋アーチ」とした。最後に、日本語にするのがなかなか難しい「バロン」（baron）であるが、本稿では差し当たってそのまま「バロン」と記すか、単に「領主」あるいは一般にしばしば用いられる「男爵」を採用した。

採りあげる聖堂は、そのほとんどが筆者が直接訪問・調査したものである。ただし私有地であったり（« privée »と記した）、アクセス困難その他の諸事情により訪問調査できなかったものには▲印を付した。それぞれの聖堂についての参考文献・資料などの参照情報は、各聖堂ごとに記したが（WebsiteはWSと略記）、全体を通してのビブリオグラフィは最後にまとめている。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ（<http://nn-provence.com>）で閲覧可能である。

30.4.16a サン=ブリ ヴァ=デ=ヴェュー／サン=ジャン教会

(Église Saint-Jean, Saint-Privat-des-Vieux)

サン=ブリ ヴァ=デ=ヴェューは、セヴェンヌの中心都市アレスのすぐ東側に隣接するコミューンである。サン=ジャン教会がある旧市街へは、アレスの駅前から東へ向かい、シロル通り（Monté de Silhol）と県道 D216 を通って約 5 キロである。サン=ジャン教会はその旧市街のほぼ中心に建っている。

村には古代の痕跡は少ない。コミューン域の南端にあるトレポー（Trespaux）地区では古代の墓地であったと思われる場所が発掘され、墓石や陶器類の破片などが見つかっている。12 世紀には« Sanctus-Privatus de Vielh »と呼ばれ、13 世紀には« Sancti-Privati de Viell »と呼ばれた。中世の前半頃にサン=ブリ ヴァ=デ=ヴェューを支配していた領主は「デ・ヴェュー家」（Des Vieux）であったとされることもあるが、これについては不明な点が多い。大革命まではユゼス司教区に属し、この地にあったプリウレはユゼス大聖堂参事会の管理下に置かれていた。1211 年に国王フィリップ 2 世（オーギュスト）がそれを確認しており、ユゼス司教が上級封建領主として村を支配した。近隣の中小の領主たち、例えばアレスのレーモン・プレ（Raymond Pelet, Alès [30.4.12a]）などはユゼス司教に臣従を誓っている。

宗教戦争の際にはプロテスタント側に立ち、カトリックによる圧力（例えばモンモランシー・

ダンヴィルの攻撃）に抵抗した。1685年にナントの勅令が廃止されるとカトリックが優勢となるが、18世紀になってカミザール戦争が起こると、1702年12月にカミザールたちがこの村のサン＝ジャン教会を焼いている。その後再建されたサン＝ジャン教会は、司祭館とともに大革命の後に国有財産として売却されるが、幸いにして取り壊されることはなく、1807年に教区教会として復活した。20世紀後半になって何度か修復工事が行われている。

サン＝ブリヴァ＝デ＝ヴューのサン＝ジャン教会は、ここに創建されたプリウレの付属聖堂として12世紀に建設された（現地案内板によれば11-12世紀）。P.A. Clémentによると、このプリウレを創建したのはサンドラス修道院〔30.4.13〕の修道士たちであるという。聖堂の内外において、同じ12世紀頃のものと思われる埋葬用の陶器が発掘されている。

建物は、2ベイからなる身廊とその東側に半円形の後陣が続く。身廊第2ベイの南北にはトランセプト様の礼拝室が作られているが、これはゴシック期以降のものである。ロマネスク期の身廊と後陣、そして改修されているが同時代の西ファサードは、整形された中石材がきれいに積まれている。この西ファサードには、中央下部に半円頭形の扉口がある。その上には外部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられ、切妻の頂部にはシンプルな鐘楼が立つ（ただしこれは近代のもの）。身廊の北側は、西ファサードから後陣の北側に至るまで、近代になってから礼拝室、聖具室その他の建物が建てられていてオリジナルの壁面を見ることはできない。身廊南側の外壁には、扶壁が2つ付けられているのが見える。第1ベイには西ファサードのものよりも古いと思われる扉口があり、二重になった半円アーチが架けられている。またその斜め上には、外部に向けて広く隅切りされた半円頭形の細長い窓が開けられている。

後陣は半円形で、整形された中石材が比較的きれいに積まれている。上部に巡らされた水平のコーニスから上はさまざまな形と大きさの石が荒積みされている。後陣の東端中央には二重の半円アーチに縁取りされた縦長で半円頭形の窓が開けられている。この二重のアーチの間に、太い円筒形のモールディングがアーチと同じく半円形で付けられている。このモールディングを左右で受け止めていた小円柱は失われているが、その柱頭の断片が残されている。

聖堂内部は2ベイからなる身廊と、それに続く半円形の内陣（後陣）から構成され、第2ベイの南北には大きな半円アーチを介してトランセプト様の礼拝室が作られている。白く上塗りされた身廊の天井には水平のコーニスの上に半円筒形のトンネル・ヴォールトが架けられている。南北の礼拝室の天井は交差ヴォールトとなっている。身廊の2つのベイの間には、南北の側壁にピラストル（ピラスター／壁付きの方形柱）が付けられ、その上に半円形の横断アーチが架けられている。第1ベイには、鉄柵で飾られた木製の2階席が作られている。その2階席の背後、すなわち身廊の西壁には大きな半円形の壁アーチが付けられ、その中に半円頭形の窓があって、採光の役割を果たしている。

東端の後陣は、上部に水平に巡るコーニスが



30.4.16a Saint-Privat-des-Vieux

付けられ、その上は半ドームとなっている。このコーニスを中断する形でロマネスク様式の窓が開けられているが、その上に二重のアーチが架かり、さらに窓の左右には下部に円形のトルスが付けられた小円柱が立ち、柱頭を介して円筒形のモールディングを受け止めるという仕様は、後陣外部のものと同じである。ただしこの内部の小円柱の柱頭（および冠板）彫刻は、ロマネスク期のものがきれいに残っている。大きくて見事なパルメット文様で、角部にはひねり紐状の茎が縦に伸び、それをはさんで左右には渦巻きが配されている。恐らくは外部に残された柱頭彫刻の断片も、かつては同じ文様であったのではないかと思われる。この後陣内部の 2 つの柱頭彫刻が、このサン=ジャン教会に残された唯一の装飾的要素である。

なおコミュニンの名にもなっているサン=プリヴァ（聖プリヴァトゥス）は、3 世紀頃のジェヴォーダン（ジャヴォルまたはマンド）の司教で、ガリアに侵入したアラマニー人（les Alamans）の王クロクス（Chrocus）に捕らえられて殉教した（Mende [48.5.1]）。その墓はマンド大聖堂の地下クリプトにある。

Bibliographie :

CAG (30/3) p.653; Clément (1993) p.113; Germer-Durand (1868) p.225; Goiffon (1881) pp.338-339; Goiffon (1916) pp.119-122; RIP.

WS : « Site officiel de la mairie de Saint-Privat-des-Vieux »

30.4.16b サン=プリヴァ=デ=ヴェー/マザックのサン=タルバン教会

(Église Saint-Alban de Mazac, Saint-Privat-des-Vieux)

マザック地区は、サン=プリヴァ=デ=ヴェーのコミュニン域の北端に位置する。サン=タルバン教会はマザックの西のはずれに建っている。アレスからだと、旧市街を北に抜けてアルザス通り（Avenue d'Alsace）を約 3.5 キロ北東に進み、現在のアレス=セヴェンヌ病院を過ぎて県道 D16 に入る。さらに 450 メートルで、細い道を北（左）に折れると約 200 メートルでサン=タルバン教会に至る。同じサン=プリヴァ=デ=ヴェーのサン=ジャン教会からだと、直線距離にして北西へ約 3 キロの位置である。

サン=タルバン教会は、この地にあったプリウレの付属聖堂であった（Sanctus-Albanus、13 世紀）。ユゼス司教区に属したが、プリウレ自体はサンドラス修道院 [30.4.13] の管理下に置かれていた。聖堂は教区教会でもあった。中世の間のサン=タルバン教会の歴史はあまりよく分からない。17 世紀には一時、アレスの聖堂参事会が所有している。18 世紀になると、ユゼス司教区内の教会会議が何度もサン=タルバンで開催されている。

大革命に際して、サン=タルバンの司祭ルイ・オワザン（Louis Oizan）は憲法への宣誓を拒否して 1793 年から 2 年間監獄に入れられるが、断頭台は免れている。聖堂は司祭館などとともに国有財産として売却され、所有者が次々と変わった。その後サン=タルバンのコミュニンの所有となるが、1813 年にこのコミュニンもサン=プリヴァ=デ=ヴェーに合併された。サン=タルバンの司祭に復帰していたオワザンは、サン=プリヴァの司祭になることは望まず、サン=タルバンに隠棲し、1816 年にこの地で亡くなっている。サン=タルバン教会は 1904 年に再び競

売にかけられてしまう。1907 年、弁護士のリオポルド・シャボーなる人物が、土地交換によってこの聖堂を手に入れ、祭儀も復活させた。1948 年に時の所有者が聖堂を教区に譲渡し、それを機に聖堂保護のためのサン＝タルバン市民の会も設立された。

サン＝タルバン教会は、東西およそ 20 メートルの小規模な建物で、3 ベイの身廊と半円形の後陣からなる。身廊外壁には第 2 ベイと第 3 ベイ（あるいは内陣のベイ）の間に扶壁が 1 つだけ付けられており、第 2 ベイの南側の、3 段の



30.4.16b Saint-Alban de Mazac

石段を登ったところに扉口が開く。それは半円頭形で、二重のアーキヴォルトが架かる。そのアーキヴォルトのアーチは、きれいに整形された扇形のクラヴォーがきっちりと組まれている。同様に身廊と後陣の外壁も、整形された中石材がていねいに美しく積まれたものとなっている。後陣においては、中石材の列と小石材の列が交互に組まれている。第 3 ベイの南側の外壁には、外側に向けて隅切りされた半円頭形の細長い窓が開けられている。美しい石組みによるその隅切り（特に頭部のアーチ部分）は、まったくロマネスク的な仕様である。同様の窓は後陣中央部にも開けられている。

後陣の北側には 19 世紀頃の聖具室が増築されている。また聖堂の西側にも近代になって建てられた司祭館が接続している。したがって西ファサードは直接は見ることはできない。身廊北側の外壁も、隣の住宅の敷地の中であるので見ることはできない。第 2 ベイと第 3 ベイの間の位置に、近代になって作られた小さな鐘楼が立っている。

聖堂内部は、比較的出張りの少ない方形のピラストルと、その上に架けられた半円形の横断アーチによって 3 つのベイに区切られる。天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。各ベイの側壁には半円形の壁アーチが付けられている。身廊北側の窓は、第 2 ベイに開けられている（南側は第 3 ベイ）。最も東側の第 3 ベイは、他の 2 つのベイよりも東西幅が狭い。これを内陣のベイと見ることもできる。後陣は半円形で半ドームが架けられている。中央には隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。西側の第 1 ベイには 2 階席が設けられている。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.112-113; Germer-Durand (1868) p.193; Goiffon (1881) p.249; Goiffon (1916) pp.122-125; RIP.

30.4.17 サン＝マルタン＝ドゥ＝ヴァルガルグ／サン＝マルタン教会

(Église Saint-Martin, Saint-Martin-de-Valgargues)

サン＝マルタン＝ドゥ＝ヴァルガルグはアレスのすぐ北に隣接するコミューンである。ここを含めてアレスとその周辺地域は、19 世紀から石炭産業が大々的に発展した。サン＝マルタン＝

ドゥ=ヴァルガルグには、アレスとの市境近くに、20 世紀後半まで稼働していた鉱山（Mine de Ladrecht）が展示施設として残されている。この鉱山は炭鉱労働者たちが労働条件改善や安全対策の拡充などを要求して 1981 年から 13 ヶ月間続けた大規模なストライキでも知られる。

古代の遺物は、サン=マルタンのコミューン域の西端にあるラヴァブレユ（Lavabreille）で 1874 年に見つかった葬儀用の骨壺や硬貨、そして 1896 年にサン=マルタン教会に隣接し



30.4.17 Saint-Martin-de-Valgargues

ていた墓地から見つかった葬儀用の骨壺などが知られる。中世にはオーヴェルニュと地中海地域を結ぶレゴルダヌの道が、サン=マルタンの地を南北に貫いていた。中世の間この地にあったブリウレ（Prieuré Saint-Martin-de-Valgalgé）は、もともとはニーム司教区に属していたが、15 世紀にはユゼス司教区に移された。直接的にはサンドラス修道院の分院としてその管理下に置かれていた。

サン=マルタン教会が最初に建設されたのは 11 世紀のことで、12 世紀に改築されている。さらに時代が下って 19 世紀には、アレス地域の炭鉱産業の発展に伴ってサン=マルタン=ドゥ=ヴァルガルグの人口が急激に増加したことを受けて、サン=マルタン教会も古い後陣部分を（不格好にそこに付けられていたコンクリート製の聖具室とともに）取り壊して、身廊を東に拡張し、身廊の南北両側に礼拝室が増築された。その礼拝室は平面プランが半円形であるので、同じく半円形で作られた後陣も合わせて上から見ると、聖堂全体が三つ葉形となっている。また同時に聖堂内部もヴォールトがかさ上げされ、身廊側壁のピラストルも高くされた。かつては身廊部より低かった後陣は、身廊部分と同じ高さに作られた。

聖堂の外壁は薄黄色の石灰岩からなる整形された中石材を主体に組み上げられている。身廊の東側と後陣の 19 世紀にかさ上げされた部分（上 3 分の 1 にあたる）は不整形の小石材による。身廊南側の、後陣のすぐ西隣にあたる壁面には 19 世紀の改築以前の石積みと、かつての持ち送り（屋根との境）に付けられていた水平のコーニスが残されている。19 世紀に建てられた半円形の後陣には南北に大きな半円頭形の窓が開けられている。特に南側には窓が 2 つ開けられている。東端（中央部分）にもかつては同様の窓が開けられていたが、現在は埋められている。同じく 19 世紀に増築された南北のトランセプト様の礼拝室にも大小の窓が複数開けられている。その礼拝室から西側の身廊部分には南北共に扶壁が並んでいる。身廊南側の第 2 ペイには中ほどの高さのところに開けられた窓に加えてその下に、横幅が上の窓の 2 倍はあろうかと思われるよりいっそう大きな窓が開けられている。身廊北側の礼拝室のすぐ東隣には聖具室が建てられている。

中石材が主体に作られている西ファサードには、一番下に方形の扉口（ファサードの中心から少し南側に寄っている）、二重の半円アーチの中を開くロマネスク様式の細長い窓、そして一

番上には高さのある鐘楼が立ち上がる。この鐘楼も 19 世紀のもので、そのすぐ下にはかつての切妻のラインの名残を見て取ることができる。

聖堂内部は、白あるいは薄い黄色の漆喰で上塗りされてきれいに整えられているので、あまり古さは感じられない。身廊は 2 ベイからなる。その東側のベイはトランセプト様の南北の礼拝室が 19 世紀に作られたことによって交差部となり、さらに半円形の後陣（内陣）が続く。身廊は南北の側壁のピラストルとそこに架けられた横断アーチによって区切られ、各ベイには半円形の壁アーチが付けられている。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトである。西端の第 1 ベイには木製の 2 階席が設けられている。その 2 階席の上にあたる西壁上部には内部に向けて隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。交差部および後陣は、すでに述べたように 19 世紀に天井がかさ上げされている。後陣には南北に半円頭形の窓が開けられ、中央には半円形のニッチがある。これはかつての窓が埋められたものである。後陣に付けられた水平のコーニスの上には半ドームが架けられている。

Bibliographie :

CAG, 30/3, p.462; Clément (1993) pp.113-114; Germer-Durand (1868) p.219; Goiffon (1881) pp.325-326; Goiffon (1916) pp.134-137; RIP.

30.4.18 サン=ジュリアン=レ=ロジェ／ノートル=ダム=デ=フォン教会

(Église Notre-Dame-des-Fonts, Saint-Julien-les-Rosiers) privée

アレスからは県道 D904 と D316 を経由して、北へおよそ 9 キロである。現在のサン=ジュリアンの村役場からだと、ミモザ通りを 600 メートルほどまっすぐ北に向かったところで D416 を西へ折れて 250 メートルである。このコミューンは、かつてはサン=ジュリアン=ドゥ=ヴァルガルグ (Saint-Julien-de-Valgualgues) と呼ばれていたが、1955 年に現在の名前になった。

ノートル=ダム=デ=フォン教会は、ここにあったシトー派のノートル=ダム=デ=フォン女子修道院の付属聖堂である。セヴェンヌ地方の修道院は、その多くがベネディクト派の男子修道院であるので、シトー派は珍しい。古くは泉の聖域であったこの場所に女子修道院が創建されたのは 12 世紀前半頃とされるが、P.-R. Gaussin は、もう少し遅い 13 世紀前半にマザン修道院の後見と保護のもとで創建されたとしている。百年戦争期の 14 世紀半ば、恐らくは 1360 年頃に、修道女たちは戦乱を避けてアレスの城壁内に避難し、ノートル=ダム=デ=フォンは放棄された。アレスに移った修道女たちは、アレス市内に今でも「修道院広場」(Place de l'Abbaye／サン=ジャン大聖堂のすぐ南)として名前が残る場所に定着したが、ほどなくして聖クララ会と合併してサン=バルナール=エ=サント=クレ



30.4.18 Notre-Dame-des-Fonts

ル修道院 (Abbaye de Saint-Bernard et Sainte-Claire) となり、大革命まで存続した。現在この修道院広場には市場のホールが建ち、古い修道院の名残は、広場の名前以外には何もない。

放棄されたノートル＝ダム＝デ＝フォン修道院は、大革命の後に国有財産として売却され、農家が所有した。聖堂は倉庫として利用された。修道士居館はそのほとんどが消滅したが、聖堂に接続する東側居館の一部がその名残をとどめている。現在は敷地全体が農家の私有地となっていてアクセスはできない。道路に面した聖堂の北側と後陣、そして敷地の門越しに西ファサードを目にすることができるだけである。

聖堂は東西の全長が約 25 メートル、身廊の南北幅は 8 メートルのシンプルな単身廊形式である。東端には半円形の後陣が付く。その西ファサードは切妻形で、中央下部には方形の出張りの中に扉口が開く。三重のヴシュールがアーキヴォルト全体を構成している。一番外側のヴシュールのアーチにはモールディングの縁取りが付けられているが、これはアーチ左右の起拱点のすぐ上で、水平に向きを変えて約 30 センチ延びる。またアーキヴォルトのうち外側 2 つの半円形ヴシュールにはそれぞれ円筒形のモールディングが付けられている。そしてそれらは冠板とも言える水平のコーニスを介して、柱頭彫刻の付けられた細長い壁付き円柱 (約 60 センチの高さの基壇の上に立つ) が受け止めている。この柱頭彫刻は、向かって左側の 2 つは劣化が激しい。そのうちの内側のものには植物の線刻と実のような丸いヴォリユートが見られる。

扉口の向かって右側 (南側) の 2 つの柱頭彫刻のうち、外側 (右側) のものは、角部に人間の頭があり (ただし損傷が進んでいる)、その間にパルメット様の葉飾りが彫刻されている。内側 (左側) のものは、この扉口の柱頭彫刻の中で最も保存状態が良いもので、角部にある人面が口から左右両側に上に向けて大きく広がったパルメット様の葉を吐き出している。シトー修道会のものであるとして、このような人面を伴う彫刻装飾のモチーフは珍しいと言える。扉口にある出入口の扉自体は、タンパン部分も含めて木製で、20 世紀に入ってから作り替えられたものである。扉口の上には、近代になって開けられた小さな方形の開口部をはさんで、その上の切妻頂部のすぐ下に、外側に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。



30.4.18 portail



30.4.18 chapiteau

身廊部は、道路に面した北側には、屋根まで達する扶壁が3つ、そして東側の第2ベイ外壁には高さが3メートルほどの太くて大きな扶壁が付けられている。この大きな扶壁のすぐ左（東）隣（つまり身廊の北東角）には、かつては聖堂内部に入るための出入口が付けられていたが、今は埋められている。これは近隣農民たちが、女子修道院の敷地の中に入ることなく聖堂内でのミサにあずかるためのものであった。後陣は半円形で、東端中央に見られる大きな方形の窓と小さな開口部は、ともに近代以降にここの所有者によって開けられたものである。この後陣には、北東側の下にやはり半円頭形の小さな出入口の名残が見られる。これは聖堂内陣における聖なる泉水礼拝のためにここを訪れる巡礼たちのために開けられていたものである。身廊南側外壁には、中ほどの位置に扶壁が付けられ、さらにその両側のベイに都合4つのロマネスク様式の窓が開けられている。それらは半円頭形で、外側に向けて隅切りされている。この窓のうち、最も東側のものは、他のものよりも高い位置にある。また、東側の第2ベイには窓の下に出入口が開けられている。これは修道院居館と行き来する修道女たちためのものであろう。

ノートル＝ダム＝デ＝フォン教会内部は、シンプルな単身廊形式である。外壁に付けられた扶壁と、内部の壁に付けられた半円柱の位置がずれている。堂内の側壁に付けられた半円柱にはアカンサスなどが彫刻された柱頭が見られる。これらの半円柱は、床まで下りるのではなく、壁の中ほどの高さに付けられた逆円錐形のコーベル（キュロ）が受け止める。よく似た仕様は、シトー会修道院にしばしば見られるもので、この近くでは例えば現ドローーム県のヴェルコール山中にある同じシトー会のレオンセル修道院（Abbaye de Léoncel [26.2.14]）や、同じく現ドローーム県のエトワール＝シュル＝ローヌ（Étoile-sur-Rhône [26.2.7]）に見ることができる。なお身廊側壁には壁アーチはない。身廊の東端には半円形の後陣が続く。

先にも触れたように、現在この旧聖堂は農家が所有しており、内部は資材などが置かれる倉庫となっている。貴重な歴史遺産であるが、なんとも残念なことであると言えよう。

Bibliographie :

Gaussin (1988) p.312; Germer-Durand (1868) p.214; Goiffon (1881) p.312; Moreau (1988) pp.244-248.

30.4.19a ラヴァル＝ブラデル／ノートル＝ダム＝ドゥ＝ラヴァル教会

（Église Notre-Dame-de-Laval, Laval-Pradel）

ラヴァル＝ブラデルは、アレスの北にあってガルドン川の東側に位置するコミューンである。およそ8キロの南北に長いコミューン域を持ち、その北側がル・ブラデル地区、南側がラヴァル地区である。現在の村役場は前者に置かれている。その役場までは、アレスから国道 N107 と県道 D128 を経由して北へ約 18 キロである。ラヴァルには5世紀頃から集落が営まれるようになり、中世にはオーヴェルニュ（ル・ピュイ）と地中海地方（サン＝ジル）を結ぶレゴルダヌの道の中継地となった。1825年にはル・ブラデルやマ＝デューがラヴァルと統合され、1937

年に現在のラヴァル=ブラデルという名前になった。

ノートル=ダム=ドゥ=ラヴァル教会は、今のラヴァル=ブラデルのコミュニオンの中ほどやや南寄りの所に位置する。ガルドン川の左岸（国道 N107 は右岸を通る）から県道 D297 を東へ約 1.5 キロ登ったルヴェルグ（Rouvergue）山地に連なるランカン（Lancan）の山の中腹斜面に建っている。中世の間、レゴルダヌの道を通して、例えば南のサン=ジールへと向かう多くの巡礼たちがここを訪れたことで知られる。また近代になってからは、アレスやラ・グラン=コンブからここを訪れる炭坑夫たちの巡礼も少なくはなかった。

聖堂の最初の建設は、9 世紀にまでさかのぼるとも言われる。その後 12 世紀になって、ヴィルヌーヴ=レ=ザヴィニヨンのベネディクト派修道士たちによって、ロマネスク様式で建て替えられた。E. Goiffon の伝える伝説によると、かつて彼らはガルドン川沿いのル・フェスク（Le Fesc／現在の L'Habitarelle 地区のすぐ北あたり）にプリウレとその聖堂を建てようとしたが、そこに建設資材を置くと、翌日にはそれが忽然と消え、今のノートル=ダム教会の場所に現れた。そこで彼らはこの場所にプリウレとその聖堂を建設することにしたのだという。14 世紀にはニーム司教区に属するとともにサンドラス修道院の管理下に置かれたが、16 世紀にはユゼス司教区に組み入れられている。聖堂は長い歴史の中で修復や改修を繰り返してきた。近代以降は、1842 年に方形の鐘塔が作られ（塔中段の壁面にその年代を印した石板が埋め込まれている）、1855 年には身廊部分が 1 ベイ分延長された。1870 年になると鐘塔の高さが加えられ、その 5 年後には塔の上に、方形の台座の上に立つ聖母像が据えられた。

ノートル=ダム=ドゥ=ラヴァル教会は、単身廊形式のシンプルな平面プランとなっている。身廊の南側に扉口をその中に収めた 20 世紀の大きなポーチ、方形の鐘塔、そして東端に半円形の後陣が続く。この後陣は、聖堂の南側から見たのでは分からないが、東側から見ると斜面に作られているために非常に高さがある 2 階建てとなっており、その 1 階部分はクリプトである（必ずしも地下を掘って作られたものではない）。そこへは内陣部の南側外壁の出張りの中に付けられている入口から狭い階段を下りる。この場所は古代には異教の寺院があったとも言われ、中世になると多くの巡礼を集めたことで知られる。ここはまた納骨堂をも兼ねていた。現在は内部の壁面が漆喰できれいに上塗りされ、聖母マリアの像が置かれている。クリプトの東側の壁にはロマネスク様式の窓が開けられているが、現在は埋められていて内部はニッチとなっており、マリア像が飾られている。

後陣の外壁は、整形された石材がきれいに積まれており、ロマネスク聖堂建築の端正さをよく伝えるものとなっている。この後陣の 2 階部分にも東端にロマネスク様式の窓とそのすぐ下に丸窓があるが、これらもまた今は埋められている。後陣の 2 階の南側にも同様の窓が開けられており、こちらは今でも採光の役割を果たしている。クリプトへの入口のある出張りの上部



30.4.19a Notre-Dame-de-Laval

には大きな方形の窓が開けられているが、これは聖堂の内部に向けては開いていない。切妻となった身廊の西壁（19 世紀）は、素っ気のないもので上部中央に大きな丸窓が開けられている。なお身廊北側は、司祭館その他の建物が直に接する形で建っているために見ることはできない。

聖堂内部は、20 世紀になって白いエナメル塗料で全体が上塗りされたため、きれいに整えられてはいるが、歴史的な古さは感じるができない。身廊は 3 ベイからなり（そのうち第 1 ベイは 19 世紀のもの）、ベイを区切る方形のピラストルとそこに付けられた半円柱の上に、二重になった半円形の横断アーチが架けられている。半円柱の柱頭彫刻には、アカンサスなどの植物文様、チュニックを身につけた人物、そして鷲などが見られる。身廊の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。第 3 ベイの南側には鐘塔の下に作られた礼拝室がある。

Bibliographie :

Clément (1993) p.114; Germer-Durand (1868) p.113; Goiffon (1881) pp.148-149; Goiffon (1916) pp.374-382; RIP.

30.4.19b ラヴァル＝ブラデル／ル・マ＝デューのサン＝ピエール教会

(Église Saint-Pierre du Mas-Dieu, Laval-Pradel)

ル・マ＝デューは、ラヴァル＝ブラデルのコミューンの南寄りに位置する。前項のノートル＝ダム＝ドゥ＝ラヴァル教会 [30.4.19a] からは、ラヴァルとカサニェットを結ぶ細い山道を約 3 キロであるが、アレスからだと県道 D906 を北へおよそ 10 キロである。

ラヴァルと同じように、古くからレゴルダヌの道の中継地・宿場として商人たちや巡礼たち、あるいは十字軍に参加する騎士や兵士たちがここ（Mansus Dei）を通っていった。14 世紀の百年戦争期には住民の数は激減したが、その後は次第に増えていったとされる。教区としてはユゼス司教区に属した。18 世紀初頭のカミザール戦争の際にはこの地方の多くの聖堂と同じく被害を受けている。

サン＝ピエール教会は、集落を南北に貫く細い街道沿いに建っている。かつてこの地にあったプリウレの付属聖堂であるが、ここを通る数多くの巡礼たちの崇敬を集めた。その建設は 11 世紀とされる。聖堂の北側には非常に古い家（その出入口にも 11 世紀と印されたリントルが埋め込まれている）が隣接し、巡礼の中継地としてのこの集落の歴史を感じさせる。聖堂の西ファサードは、良く整形された石材が比較的しっかりと積まれたもので、飾り気はなく、半円頭形の扉口が付けられている。そのタンパンには 20 世紀まではラテン十字が彫刻されていたが、その後削除されたようで、現在は装飾の類いはまったくない。切妻の上には小さいがすらりとした鐘楼が載せられている。

身廊の南北の外壁には、屋根まで立ち上がる扶壁が 3 つずつ付けられている。南側では中央の扶壁の左右のベイに、縦に並べられた方形の窓が 2 つずつ開けられているが、これは近代以降のものである。身廊の北側には開口部は見られない。

聖堂の東側は、通常見られるような半円形の後陣ではなく、平面形の東ファサードの壁となっている。しかしその壁面の左右の端において、南北方向に向く扶壁とは別に、東側に突き出



30.4.19b Saint-Pierre du Mas-Dieu

す太くて強固な扶壁が付けられている。その扶壁の頂部は、東ファサード上部の切妻の傾斜に合わせるようにして斜めに切られているので、この聖堂を東側から見ると、それはあたかも要塞建築のような印象を受ける。この 2 つの扶壁の間の壁面には、足場を組むための小穴が並ぶ。またこの壁面の向かって左下には、近代になって聖具室が作られている。聖堂の東側は古い墓地で、19 世紀後半から 20 世紀前半くらいの古い墓石が打ち捨てられたように並んでいる。現在の墓地は集落の南はずれにある。

聖堂内部は 2 ベイからなる単身廊形式で、東側の第 2 ベイが内陣を構成している。半円形の後陣はない。各ベイの南北には半円形の壁アーチが付けられている。ベイを区切る方形のピラストルは実物ではなく、絵で描かれたものである。堂内は白い漆喰で上塗りされており、歴史的な古さはあまり感じられない。

Bibliographie :

Germer-Durand (1868) p.128; Goiffon (1881) p.165; Goiffon (1916) pp.383-384; RIP.

30.4.20a ルソン／サン＝マルタン教会 (Église Saint-Martin, Rousson)

アレスから県道 D906 を約 10 キロ北へ行くと「Le Plateau/Castellas Église du 12ème S.」と記された標識が立つ交差点があり、そこを右折して東へ向かう。750 メートルほど進むと、ルソンの古い城塞である「カステラス」(Castellas) の遺構が残る岩山の下、「プラトー・ドゥ・ルソン」(plateau de Rousson) と呼ばれる開けた場所に出る。そこにはルソンのコミュニーの大きな墓地があり、サン＝マルタン教会はその墓地の西側に建っている。

中世の間、ルソンの封建領主はユゼス司教であった。この地にプリウレとサン＝マルタン教会が建設されたのは 12 世紀のことである。サン＝マルタンはかつてはルソンの教区教会で、ユゼス司教区に属した。1472 年にアレスのサン＝ジャン教会がコレジアルに格上げされた際に、ルソンのプリウレもコレジアル教会参事会の管理下に移された（この参事会は、さらに 1694 年にはアレス大聖堂の参事会となっている）。大革命の後には聖堂は一時的に閉鎖されるが、1796 年に祭儀が再開されている。南側に接して現在も残るプリウレの建物（司祭館ほか）は 17 世紀前半頃のものである。

サン＝マルタンの現在の平面プランはラテン十字形である。もともとは単身廊に半円形の後陣が付くというシンプルなものであったが、トランセプトが増築され、交差部の南北はそれぞれ礼拝室となり、さらにその東側に、最初の主後陣に並ぶ形で小後陣が作られた (P.A. Clément はこの増築・拡張を 14 世紀としている)。身廊の天井は 17 世紀初め頃にかさ上げされたうえで架け替えられた。後陣に付けられた聖具室は 19 世紀のものである。1980 年代にも大々的に

修復工事が行われている。

西ファサードは、ルソンの集落からカステラスへと続く登り道に面しており、聖堂の扉口は、その道から 11 段の石段を上ったところに作られている。それには大きなクラヴォーが組まれた半円形のヴシュールが架かる。タンパンにはステンドグラスがはめられている。扉口の上には大きな丸窓が開き、やはりステンドグラスがはめられている。西ファサードの上には、切妻形で背の高い鐘楼が立ち上がる。丸窓と鐘楼は 17 世紀のものである。壁面全体は、中小石材が



30.4.20a Saint-Martin de Rousson

比較的にいいに積まれたものとなっている。この西ファサードおよび身廊の南側は、14 世紀に建てられたトランセプト以外にも司祭館や聖具室その他の建物が増築されていて、ロマネスク期の外壁はほとんど見る事ができない。墓地に面した身廊北側は、トランセプトと近代になって付けられた礼拝室が並ぶ。その 2 つには大きな半円頭形の窓が開けられているが、西側の身廊外壁には開口部は見られない。

聖堂東側には、半円形の主後陣とその左右に小後陣が並ぶ。壁面の積み石が壁面の中ほどの高さのところを境に上下で異なっている。北側の小後陣には隅切りされたロマネスク様式の窓が残されているが、中央の主後陣は 19 世紀に増築された聖具室によって、その半分が見えなくなっている。主後陣中央のロマネスク様式の窓も聖具室によって無残にも塞がれてしまっており、かろうじて窓の頭部のアーチの組み石の名残が見えるだけである。南側の小後陣は聖具室によって完全に遮られていて見ることができない。

西ファサードの扉口から聖堂内部に入ると、3 ベイからなる身廊となるが、トランセプトと南北 2 つの礼拝室が増築されているために、第 2 ベイから東側は 3 廊式のように見える。もともとは単身廊のシンプルなプランであった。主身廊は南北幅約 3.5 メートルであるが、東側の第 3 ベイ（つまりトランセプトの交差部様のベイ）は、それよりも少し狭い。身廊のヴォールトは尖頭形のトンネル・ヴォールトで、これは先にも触れたように 17 世紀初め頃にかさ上げされたうえで架け替えられたものである。その際に新たに架けられた横断アーチは、身廊側壁のピラストルや、南北の側廊様の礼拝室との間に連なるアーケードの柱の上に下りている。南北のトランセプトに作られた礼拝室は、近代になって整えられたものである。主後陣と左右の小後陣は半円形で、主後陣の窓は埋められている。また主後陣の南側には聖具室への出入口が開けられている。

Bibliographie :

Bardy et al. (1966) p.136; Clément (1993) pp.400-401; Germer-Durand (1868) p.190; Goiffon (1881) p.245; Goiffon (1916) pp.130-134.

WS : « Base Mérimée (Église Saint-Martin de Rousson) »

30.4.20b ルソン／カステラスの城塞礼拝堂 (Chapelle de Castellás, Rousson) ▲

ルソンの古い城塞であるカステラス (castellás) の遺構が残る岩山は、ルソンのコミューンの北側に位置する。ルソンのサン＝マルタン教会からさらに北へ続く急斜面の山道を 500 メートルほど登る。遺構が残る標高 398 メートルの岩山の頂上からは、アヴェヌ川 (l'Avène) の流れる溪谷と平野を広く見渡せる。ここには古くは鉄器時代に、要塞化されたガリア人のオッピドゥムがあった。古代にはロデヴとアルバを結ぶ街道沿いに、そして中世にはユゼスとセヴェンヌを結ぶ街道沿いに位置したために、監視と関所としての重要な役割を果たした。城塞の建設は 11 世紀とも言われ、その名は 1156 年の史料に «castrum de Rosone» として現れる。最初はユゼス司教が所有したようであるが、その後アレスの領主 (バロン) であったブレ家がそれに取って代わる (ユゼス司教には臣従)。13 世紀のアルビジョワ十字軍の後に破壊され荒廃し、16 世紀後半の 1588 年に最終的に放棄された。

カステラスの遺構は、南北約 25 メートル、東西約 15 メートルの長方形をしていて、外壁の土台部分が残されている。城塞礼拝堂はその遺構の北東部分にある。身廊は内側が東西約 5 メートル、南北約 4.5 メートルのおおよそ正方形である (少しばかり東西が長い)。残されているのは壁の下半分にあたる基礎部分であるが、その石積みは整形された中石材がきっちりと積まれたものである。東側の壁の中央が小さな半円形の後陣となっており、かつてその上に架けられていた半ドームの土台部分の組石が残る。礼拝堂を取り囲む壁の厚さが 1.5 メートルほどあり、後陣はその壁の中に収まっていて、外側からは見えない。開口部はない。礼拝堂の南西の角に、出入口が作られている。かつては存在したと思われる礼拝堂の開口部は、13 世紀に建物の上半分が破壊された時に消滅したと思われる。

ルソンのコミューンには、古いカステラスに代わって、そこからおよそ 2 キロ南に、ジャック・デグラック・ドゥ・ボームフォール (Jacques d' Agulhac de Beaumefort) によって 17 世紀初めに建設されたルソン城 (Château de Rousson) がある。別名トゥルイアス城 (Château de Trouillas) と呼ばれる。彼は 1588 年にルソンの領地を手に入れ、1600 年頃から 1610 年頃にかけて (または 1611 年から 1615 年にかけて) この場所に城を建設した。宗教戦争に際してはプロテスタントの襲撃によって被害を受けた。1629 年のアレス攻囲の際に、枢機卿リシュリユーがこの城に滞在した (ただし彼と共に南仏まで来た国王ルイ 13 世は、ここから 3.5 キロ南東のサランドルに滞在したとも言われる)。城はその後、建設者の子孫で「白いご婦人」ことブランシュ・ドゥ・レドゥノン (Blanche de Lédénon) とその夫フランソワ・ドゥ・ヴァデル (François de Vadel) の夫婦をへて、その家系に連なるバリー家が引き継ぎ、現在に至る。

城は中庭を居館が取り囲む四角形のプランで、四隅に大きな円塔が立つ。この円塔には小さな方形の銃眼がいくつも開けられている。南東のファサードにルイ 13 世様式の立派な門扉が作られている。その 2 階にはルネサンス様式の窓が並んでいる。ルソン城は現在は高級シャトーホテルとなっている (なおルソン城の公式ウェブサイトは、この城を最初に建設したバロンの名を「ジャック」ではなく「シャルル」としている)。

Bibliographie :

Moreau (1997) pp.169-170.

WS : « Site officiel de la mairie de Rousson », « Site officiel du Château de Rousson ».

30.4.21 アレーグル＝レ＝フェュマド／アレーグル城の城塞礼拝堂

（Chapelle castrale du Château d'Allègre, Allègre-les-Fumades）遺構

アレーグル城（Château d'Allègre または Castrum d'Allègre）は、例えばルソン（Rousson）からは県道 D16 と D37 を通って東へ向かい、およそ 12 キロである。アレスからだと同じく県道 D16 と D37 を北東におよそ 20 キロである。D37 沿いに駐車場が作られていて、そこから細い坂道を 150 メートルほど登ると城の西端の入口に至る。この城は、ブーケ山（Mont Bouquet）の北に位置する標高約 275 メートルの小山の上に、城壁、塔、居館、そして城塞礼拝堂など、さまざまな建物の遺構が東西に長く連なるもので、全体の広さはおよそ 1.5 ヘクタールにも及び、中世の城の遺跡としては、ちょっとした城塞都市と言ってもよいくらいに規模の大きなものである。

城の最初の建設に関する歴史はよく分かっていない。1163 年 8 月に、城主ベルナル・ドゥ・フェレロル（Bernard de Ferreyroles）がアレスの領主ベルナル・プレ（Bernard V Pelet、メルグイユ伯を兼ねる）に臣従した際の文書に、この城の名前が現れる（castrum de Alegrio）。フェレロル家は、プレ家を介してトゥールーズ伯に従っていた。この城はかつてはテンプル騎士団の拠点であるとされたこともあるが、これは誤りである。ただし城のその後の所有関係は、アレーグル家（最初のフェレロルとは別家のようなものであるが正確なところはよく分からない）を含めた複数の領主たちによる共同支配などもあって複雑に推移する。12 世紀終わり頃から 13 世紀にかけては、アンデューズ家の名前がそこに加わっている。しかしその頃には王権が次第にその勢力を南フランスに伸張させていた。実際、1156 年には国王ルイ 7 世（在位 1137-1180 年）が、この地域で所有していたいくつもの街や城を時のユゼス司教に譲渡しているし、1211 年には国王フィリップ 2 世（オーギュスト、在位 1180-1223 年）が、その譲渡およびアレーグルの領主たちがユゼス司教に臣従すべきことを確認している。

アルビジョワ十字軍によるトゥールーズ伯の敗北以降は、ユゼス司教がアレス周辺地域の権益を享受し、あらためて現地領主たちの臣従を受けることになる。14 世紀には引き続きアレーグル家がこの地の主要な領主としてとどまり続けるが、いくつもの領主たちによるアレーグルの城と領地の共同支配は継続した。主要領主は、その後はジェヴォーダンのランドン（Randon／Chateauneuf-de-Randon）家からビュドス（Budos／Guyenne）家へ、18 世紀終わりには一時的にコンティ（Conti）家の手に渡り、さらにその後モンタレ（Montalet）副伯家の手に渡っている。なお 14 世紀終わりには、アレーグル家のベルトラン（Bertrand d'Allègre）がブサルモディ修道院の修道士となっており、後にはグダルグの修道院長としてその名を残している。

城は 14 世紀の百年戦争の際に傭兵くずれの盗賊たちによってかなり略奪を受けた。その後はアレーグルの農民たちが城壁の外側に集落を作って住み着くが、次第に荒廃が進み、17 世紀後半には城塞の大部分が放棄された。19 世紀終わり頃になると集落を営んでいた農民たちも離れていった。城の中央北側にルビエの家（Maison Loubier）が残されているが、これはかつて

の北西の塔である。1780年にジャン・ルビエという農民が買い取り、1910年までここに住んでいた。

アレーグルの城は、塔や領主の居館を取り囲む「内側の城壁」と、さらにその北側に農民の住居などをその中に含める形で作られた「外側の城壁」によって防御されていた。ただし外側の城壁は現在はあまり残されていない。内側の城壁の内部は、西側から「西の塔」(Tour Ouest)、 「南の塔」(Tour Sud)、 「北の塔」(Tour Nord)、 「北西の塔」(Tour Nord-Ouest／後のルビエの家)、 「城塞礼拝堂」、さらに「大居館」(Ensemble Palatial)をへて「北東の塔」(Tour Nord-Est)、そして東端の「東の居館」(Maison Noble Est)まで、小山の上に東西およそ180メートルにわたってさまざまな建物が連続する形で建設されている。これは、アレーグルおよびその周辺の共同領主たちが建設した建物の、いわば集合体である。S. Aspardによれば、このうち「城塞礼拝堂」を中心にして「西の塔」、「北西の塔」、「大居館」の一部をなす塔が11世紀に建設された最も古いものである(石積みは« opus incertum »)。次に12世紀から13世紀にかけて「南の塔」と「大居館」の残りの部分、内側の城壁に沿った「北東の塔」と「東の居館」が建設され、最後に14世紀から15世紀にかけて、すなわち百年戦争期に、「領主の居館」から「東の居館」にかけての一群の建物が建設されるとともに、城の北側の建物をつなぐ城壁が作られた。

城塞礼拝堂(Chapelle castrale)は、今も述べたように、その建設年代は11世紀で、アレーグルの城の中では最も早くに建てられたものに属する。ベイが1つだけの長さ6メートルの身廊に半円形の後陣が付くというシンプルな形をしている。この後陣を含めた東西の全長(内法)は8.2メートル、南北幅は3.35メートルの小さな礼拝堂である。身廊の北壁は城の「内側の城壁」の一部となっていて、後陣のすぐ東側には城に出入りするための城門が開かれている。礼拝堂の身廊南側の出入口は3つの塔に囲まれた城の内庭に面している。身廊の壁の厚さは80～90センチで、不整形の小石材が不規則に積まれている。

扉口は身廊の南西端にあって、かつては半円形のアーチが架けられていたと思われるが、現在は礼拝堂全体のヴォールトとともに失われている。身廊南壁もかなり失われているが、身廊



30.4.21 Chapelle castrale du Château d'Allègre

の西側と北側の側壁は残されていて、西側の壁には失われたヴォールトの痕跡と、高い位置に銃眼のような開口部が見られる。この西壁の下からは炉の跡が見つかっている。城壁の一部となっている北側の壁には、ヴォールトの起拱点となっていた言わばコーニスを作る石組みが水平に連なる形で残されている。

後陣は、近年の修復の手が入ってはいるが、比較的によく残されている。身廊と後陣の間にあったアーチ（いわゆる「凱旋アーチ」）は失われている。後陣の石積みはやはり不規則なもので、とりわけ半ドームのそれは、整形されていない小さな石が集められてぎっしりと詰め込まれているといった印象である。後陣の中央部には、整形された梓石によって作られた窓が開けられている。内部に向けて隅切りされており、左右の側石の上には小さなインポストがあり、その上に4つのクラヴォー（正確には頂部に細長い石が1つ入れられている）によって組まれた尖頭形のアーチが架けられている。14世紀から15世紀にかけて城の北側の一連の建物をつなぐ城壁が作られ、礼拝堂も要塞化された際、後陣に接する部分（城門のすぐ西隣の場所）に、三日月形の開口部をわざわざ作って、後陣の窓に外部から光が入るようにしている。ただし実際に採光の役割をどれほど果たしていたのかは疑問である。

この礼拝堂は、アレーグルの城の最初期（11世紀）から存在し、城内では領主たちの建設した塔からは離れた（独立した）場所に建てられていた。洗礼、ミサ、葬儀などの宗教的な祭儀のために利用されていたのは言うまでもないが、その他にも城の共同領主たちの間での政治的な儀式、すなわちオマージュ（臣従礼）、各種の封建的協約の締結や確認、あるいは経済的な取り決め、領地や所有物の確認などの儀式が執り行われる場所でもあったと思われる。

2000年代に入って行われた考古学調査で、礼拝堂の中と礼拝堂の南側の内庭で墓地が発見されている。礼拝堂の中では新生児から10歳未満の子どもの遺骸が数体、内庭ではやはり子どものものを中心とした10体以上の遺骸が見つかっている（成人女性のものもある）。14世紀から15世紀を中心に17世紀に至るまでの異なる時期にわたって埋葬されたものとされるが、子どもの遺骸が多いことから、それらは戦乱や疫病の犠牲者であったとも推測される。

アレーグル＝レ＝フェマドには、コミュニーのほぼ中央に位置するアルランド（Arlende）地区に、サント＝マリー礼拝堂（Chapelle Sainte-Marie d'Arlende）がある。現在の村役場から県道D7を北へ約1.2キロのところで東（右）に折れて350メートルである。墓地に隣接する小さな聖堂で、身廊の南北に礼拝室が付き、半円形の後陣には低い位置に半円頭形の細長い窓が開けられている。もともとの建物は古いものであったが、16世紀になってロマネスク風の聖堂としてすっかり建て替えられた。後陣の窓の枠組みなどは、古い聖堂のものからの転用かも知れない。

Bibliographie :

Aspord (2000) pp.101-124; Aspord (2001) pp.66-68; Aspord-Mercier (2006) pp.49-57; Clément (1993) p.108; Germer-Durand (1868) p.6; Goiffon (1881) p.15; Haspel (2010) pp.7-10; Moreau (1997) pp.24-25; RIP.

30.4.22 サン=ジャン=ドウ=マルエジョル=エ=アヴェジャン/アヴェジャンのサン=ピエール教会

(Église Saint-Pierre d'Avéjan, Saint-Jean-de-Maruéjols-et-Avéjan)

アヴェジャンのサン=ピエール教会へは、アレスから県道 D904 を北へ 20 キロ進んでサン=タンブロワ (Saint-Ambroix) で D51 に折れる。東に約 10 キロでサン=ジャン=ドウ=マルエジョルの集落に入り、そこからさらに D979 を北へ進む。2.5 キロでアヴェジャンの集落に向かう D550 が分かれるので、それを東へ 550 メートルほど行くと、アヴェジャンの集落の北側に建つサン=ピエール教会に至る。アルデッシュ県との県境までは西へ約 3 キロの位置にあたる。

アヴェジャンがサン=ジャン=ドウ=マルエジョルと合併して現在のコミューンになったのは 1813 年のことである。それまでは独立したコミューンで、その歴史は古い。少なくとも 1272 年には「Avejanum」としてその名が史料に現れる。ユゼス司教区に属し、サン=タンブロワの主任司祭の管轄下にあった。12 世紀以来アヴェジャンの領主はバンヌ家 (Banne d'Avéjan) で、彼らは代々サン=ピエール教会の身廊南側に作られた墓所礼拝室 (chapelle funéraire) に埋葬されてきた。16 世紀には一時的にプロテスタントとなっている。1655 年、バンヌ家の当主ドゥニ・ドゥ・バンヌ (Denis de Banne) はカトリックに戻り、国王軍司令官 (Lieutenant général des armées du Roi) となった。その息子のルイ (Louis) も同じキャリアを継いでいる。そうしたこともあって、アヴェジャンは 1732 年に男爵領 (baronie) に格上げされ、さらに 1736 年には侯爵領 (marquisat) とされた。なおバンヌ家はこのドゥニとルイの時代に、パリにおいて今のオルセー美術館の近くのポワティエ通りに大きな居館を建てている。そこは現在はフランス国立書籍センター (CNL) となっている。またルイの弟のシャルル (Charles de Banne) は 1721 年からアレス司教となった。アヴェジャンのバンヌ家はこうして輝かしい栄達を見たにもかかわらず、その直系は 1741 年に断絶している。

サン=ピエール教会の建設は 12 世紀後半のことである。16 世紀の宗教戦争の時に被害を受け、さらに 17 世紀に領主がカトリックに戻ったこともあってか、1703 年 1 月にはカミザールたちの襲撃に遭い、司祭館とともに部分的に破壊された。彼らはその翌月にも再びアヴェジャンの村を襲い、サン=ピエール教会を焼くとともにこの村の 15 人のカトリックを殺害したという。聖堂はほどなく修復され、19 世紀までは教区教会であったが、20 世紀半ばにはその役割も終え、サン=ジャン=ドウ=マルエジョル=エ=アヴェジャンのコミューンの所有となった。1993 年からは、半ば廃墟化していた墓所礼拝室の再建を含めて聖堂全体の大々的な修復工事が行われた。現在はコンサートや美術展などのイベントのために使われている。

聖堂の扉口は身廊第 1 ベイ南側に開く。扉の上に架けられた半円形のアーキヴォルトは、円筒形の太いモールディングを含めて、四重になった半円形のヴシュールから構成される。一番外側のアーチは切り整えられたクラヴォーがきっちりと組まれており、左右の側壁がそれを受け止めている。内側の 3 つのヴシュールは、インポストを介して (ただし一番内側のヴシュールは横長のリンテルを介して) 左右の側柱が受け止めている。インポストの下には円柱が立てられていたと思われるが、今は左右ともに失われている。リンテルの上の半円形のタンパンは、その外側を、丸い玉と横長の楕円文様 (一種の「perles et pirouettes」) が連なるモールディン

グによって縁取られている。タンパン自体は破損と摩耗がかなり進んでいて、そこに彫刻されているとされるキリスト、ペトロ、パウロの3人の人物は今は判別が難しい。中央にいる人物の上半身像は、頭の光輪に十字が付けられているのでかろうじてキリストであると推測できる。扉口の上には隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。

この扉口が開けられているベイを含めて、身廊部の外壁は整形された石灰岩の中石材を主体として規則正しく積まれたものとなっている。南北ともに扶壁が3つずつ付けられている。聖堂の西側には住宅が接している。身廊第2ベイの南側には、あたかもトランセプトの翼廊のような形でバンヌ家代々の墓所である礼拝室が作られている。先にも触れたように当主のドゥニ・ドゥ・バンヌが1655年にプロテスタントからカトリックに改宗したことに対する報復からか、1703年にカミザールたちがアヴェジャンの村とサン=ピエール教会を襲撃した際に荒らされて破壊されたものである。1990年代まではヴォールトが失われ壁面も崩れてしまって廃墟化していたが、1993年からの修復工事によって今ではきれいに再建されている。礼拝室の南壁には尖頭形の大きな窓が開けられている。またこの礼拝室の南西角の壁面には、丸い目を見開いてこちらを見るユニークな顔の彫刻と、トカゲの彫刻がはめ込まれているが、これらは言うまでもなく1993年の再建工事の際に作られたものである。身廊の北側は第2ベイの上に、隅切りされた小さな窓が開けられている。頭部はセグメンタル・アーチである。またその西隣の第2ベイの下には、ゴシック様式の小さな扉口が開けられている。その扉のすぐ上に半円形のアーチの石組みが残されている。6つのクラヴォーがきれいに並べられており、古いロマネスク期のものと思われる。

墓地に面した半円形の後陣は、身廊部よりもさらに精緻な石積みで作られている。整形された中石材によるすき間のない石積みがいかににもロマネスク的で美しい。東端中央に、外部に向けて大きく隅切りされた半円頭形の細長い窓が開けられている。これもまたロマネスク期のものである。また後陣の南側にも窓が開けられているが、こちらは円形で、近代以降に開けられたものではないかと思われる。この後陣の北側には、19世紀頃の大きな聖具室兼物置が建てられているが、残念ながらそれはこの後陣の美しい姿を損ねてしまっている。ミサなどの祭儀はもう行われないのであるから、取り除かれてもよいのではないかと思われる。

サン=ピエール教会の内部は、2ベイからなる単身廊で、その東側に半円形の後陣が続く。身廊の2つのベイには南北それぞれに二重の壁アーチが付けられ、同様に二重になったピラストルとなって床まで下りている。身廊の天井は、半円筒形のトンネル・ヴォールトなのであるが、宗教戦争期に被害を受けた後であろうか（正確な時期は不明）、より低い位置に架け替えられた。そのために半円筒形のヴォールトに架かる横断アーチは半円形ではなく尖頭形となっている。その横断アーチはインポストを介



30.4.22 Saint-Pierre d'Avéjan

して方形のピラストルが受け止める。横断アーチと身廊南北の壁アーチを受け止めるピラストルにはインポストがあって、線刻の装飾が認められる。特に横断アーチのそれは、パルメットその他の植物文様である。身廊の西壁には、向かって右端に半円頭形の小さな出入口の名残が見られる（現在は埋められている）。また身廊第 1 ベイの北側には木製の階段を 3 段登ったところに、外に通じる出入口が作られている。

身廊第 2 ベイの北側には石段が付けられており、かつての説教壇の土台部分が残されている。その反対側の身廊第 2 ベイの南側には、大きな半円アーチを介してバンヌ家代々の墓所である礼拝室が作られている。先にも触れたように 1993 年からの工事で再建されたものである。墓所と言っても今は中には何も無い。天井は交差しリブ・ヴォールトである。この礼拝室に接する身廊壁には窓が 1 つあるが、現在は埋められている。

後陣は半円形で、水平のコーニスの上に半ドームが架かる。中央には内部に向けて大きく隅切りされた細長い窓が開けられ、その窓のすぐ下には方形のニッチが作られている。聖具などを置くスペースであったのであろう。後陣の南側には丸窓が開けられている。後陣に置かれた横長の祭壇のテーブルのその中央に石板がはめられており、その表面には中央と四隅に十字が線刻されている。

サン=ピエール教会は現在はコミュニーの所有となっており、コンサートや展覧会などのイベントに使用されている。またアヴェジジャンのバンヌ家の城館は、サン=ピエール教会のすぐ西にある。東側の 2 つの角には大きな円塔が残されている。建物にはルネサンス様式の窓が並んでいる。

Bibliographie :

CSAF, no.11, 1998, pp.138-139; Clément (1993) pp.106-108; Germer-Durand (1868) p.17; Goiffon (1881) p.33.

WS : « Site officiel de Saint-Jean-de-Maruéjols-et-Avéjan »

30.4.23 メランヌ／ノートル＝ダム教会 (Église Notre-Dame, Meyrannes)

アレスから県道 D904 を北へおよそ 20 キロ行くとサン=タンブロワとなり、すぐにセーズ川を渡る。約 1 キロで D51 が西に分かれるので、それを 5 キロ進みメランヌのコミュニーに入って 2 つ目の小さなロータリー右折して北へ向かう。「Église romane XII^eme siècle」の標識に従って約 350 メートルほど上り、小さな十字路をさらに南へ左折すると、150 メートルでセーズ溪谷を見下ろす高台に立つメランヌのノートル＝ダム教会に至る。

メランヌの名が史料に現れるようになるの



30.4.23 Notre-Dame, Meyrannes

は、961 年（Mairanichos）や 1037 年（Mairanègues）のことである。ユゼス司教区に属し、サン＝タンブロワの主任司祭の管轄下にあった。この地には 16 世紀から炭坑があった。19 世紀にそれが大々的に開発されるが、1966 年には閉坑している。

ノートル＝ダム教会は小さな広場の東端に建てられている。後陣は真東ではなく北東を向いている。建設されたのは 11 世紀末から 12 世紀前半頃で、もともとはここにあったベネディクト派プリウレの付属聖堂であった。19 世紀終わりに大々的に改築が行われている。その際には後陣が拡張され、トランセプトに礼拝室が増築された。さらに第 1 ベイにトリビューンが作られるとともに、その上に不釣り合いなほど大きな鐘塔が建てられた。

全体の平面プランはトランセプトを持つラテン十字形である。トランセプト交差部の上には円形のクーポール（内部は八角形）が載る。西ファサードは頭部が切妻形で、その壁面は褐色の中石材を中心にラフに積まれたものである。その中央下部には扉口が付けられている。扉の左右には基壇の上に太い円柱が立つ。その円柱の基部には丸いトルス、そして上部には柱頭彫刻が付けられており、インポストを介して扉の上のアーキヴォルトを受け止めている。

扉口のこの柱頭彫刻は 11 世紀以前のプレ・ロマネスクのものである。カロリング期の雰囲気色が濃く感じられ、現在の建物が作られる前にあったさらに古い聖堂のものかも知れない。現在の聖堂の地下からは古代ガロ＝ローマ時代の遺物も見つかっているため、ここにカロリング期の古い聖堂が建てられていた可能性は充分にあると思われる。向かって左側の柱頭に彫刻されているのは、上に向けて開いて先端が渦を巻く植物文様の線刻、「8」の字形になった三条線の組紐文様、丸くきれいに花びらが並ぶヒナギク、松ぼっくりなどである。破損していて判別が難しいのであるが、横木につかまる人面のようなものも認められる。一方、向かって右側の柱頭は左側のものよりも保存状態が悪い。同じように植物文様が彫刻されているが、葉脈のスジなどは太い。葉の間からは顔の上半分だけを出してこちらを見つめる不思議な人物の顔が彫刻されている。大きな目と鼻、そして縦筋の付けられた髪（あるいは冠か）がユニークである。



30.4.23 chapiteau (gauche)



30.4.23 chapiteau (droit)

タンパンを囲む半円形のアーキヴォルトは、一番外側がクラヴォーの組まれたアーチで、その内側には、一定間隔でさまざまな形の花弁が彫刻されたヴシュールがあり、その次に細いモールディングを経て、太い円筒形のヴシュールが続く。細いモールディングに縁取りされた半円形のタンパンの彫刻は、組紐による大小6つの円環が連なるもので、下部中央の円環の中には神の子羊、左右の円環の中には魚と鷺がいる。その上の3つの円環には形が異なる美しい花弁が彫刻されている。ただしこのタンパンの彫刻は20世紀になって新たに作られたものである。

先にも触れたように、19世紀末の改築の際に、第1ベイの上に身廊部とは不釣り合いな大きさの方形の鐘塔が建てられた。20世紀初め頃の古い写真にそれを見ることができる。その光景はもはや異様とも言っても良いものであったが、1981年に賢明にも取り壊され、聖堂はかつての均整の取れた姿に戻された。またその同じ時に、内部においても第1ベイのトリビューンが取り除かれている。

身廊北側にはトランセプトと19世紀にそのすぐ西側（内部では第2ベイの南北にあたる）に作られた礼拝室が並んでいる。それぞれ尖頭形で縦長の窓が開けられている。後陣は19世紀の改築の際に古いものを取り壊して大きく東側に延長された。壁面は不整形の石が不規則に乱積みされている。左右（南北）の上部に小さな窓がそれぞれ開けられているが、中央には窓はない。後陣のすぐ西側とトランセプトの南翼には司祭館の建物が接続している。第1ベイの南側には、小さな出入口が開けられていて、これはかつては修道士たち専用のものであった。

交差部の上に立つクーポールは、外部は円形である。その壁面にはニッチの半円アーチがまるで大きなロンバルディア帯のように連なっている（南と東側にだけ開口部がある）。そのアーチ列を受け止める小さな壁付きの半円柱には、これもまたカロリング期を思い起こさせる図形的な線刻彫刻が施された柱頭彫刻が付けられている。三角形の連なりや渦巻き、単純な葉飾り、菱形のチェック模様など。クーポールの上には、水平に巡らされたコーニスの上に板石を並べた円錐形の頭頂部が載る。

聖堂内部は単身廊形式である。身廊は3つのベイからなり、第3ベイはトランセプトの交差部である。さらにその東側に内陣と半円形の後陣が続く。第1ベイと第2ベイの天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトで、ベイの間には半円形の横断アーチが架けられている。ヴォールトの起拱点には水平のコーニスが付けられているが、北側のコーニスと横断アーチのインボストはダンティキュル（小さな直方体を等間隔に並べたモールディング）装飾である。第1ベイ南側にも装飾的なコーニスが連なるが、これは20世紀の改修（第1ベイのトリビューンの取り壊し）の際に付けられたものである。また第1ベイと第2ベイの間の横断アーチはコーニスのすぐ下で縦長の逆三角形コーベル（コンソール）が受け止めている。それに対して身廊西端および交差部の東西、そして内陣と後陣の間に架かる横断アーチは方形のピラストル（壁柱）となって床まで下りている。

身廊第1ベイの南北には半円形の壁アーチが付けられている。南側にはかつては修道士専用であった小さな出入口が見られる。第2ベイの南北には、19世紀に作られた側室があり、北側のそれには第一次大戦の戦没者銘板が、また南側の側室には彫刻装飾の豪華な洗礼盤（1967年

ラルギエ作）が置かれている。第3ベイすなわち交差部（トランセプト）の南北は礼拝室となっており、それぞれ東側にはあたかも小後陣のように、半ドームの架かる小さなニッチが付けられ、小さな石の祭壇が置かれている。また南北ともに隅切りされた窓が開けられている。

交差部を形作る4つのアーチは二重になっており、さらにその上には四隅のトロンプ（無装飾）に支えられてクーポールが載る。外側は円形であるが、内側は八角形となっている。そのうち東面と南面には窓が開けられている。東面の窓には聖母のステンドグラスがはめられている。

内陣には見事な彫刻の施された大きな石灰岩の祭壇が置かれている。身廊南側の側室に置かれた洗礼盤と同じくラルギエによって1967年に作られたものである。祭壇には木製で彩色された「メランヌの聖母像」（17世紀）と「シャルル・ドゥ・ヴィサックのチボリウム（金属製の聖体容器、19世紀）」が置かれている。シャルル・ドゥ・ヴィサックは1855年10月に殺されたこの教区の司祭である。内陣の北東角には、大革命期のものであろうと思われる、青・白・赤で彩色された木製の聖櫃も置かれている。19世紀に拡張された後陣は、半円形で半ドームが架かるが、水平のコーニスや中央の窓ではなく、素っ気のないものである。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.401-402; Germer-Durand (1868) p.136; Goiffon (1881) p.171; RIP.

30.4.24 クリー／聖母マリア生誕教会（Église de la Nativité-de-Marie, Courry）

クリーは、アレスから県道 D904 を北へ約 27 キロである。アルデッシュ県との県境に接するコミューンである。セヴェンヌ山地に連なるスーブの山の麓にクリーの旧集落があり、その中心に聖母マリア生誕教会が建っている。

クリーの名は 10 世紀には史料に現れる。中世の間、クリーは地理的にはユゼス司教区内に位置したが、教区としてはヴィヴィエ司教区に属していた。聖母マリア生誕教会はここにあったブリウレの付属聖堂で、建設は 12 世紀である。このブリウレは、クリーから直線距離にして約 20 キロ北西にあるボンヌヴォーのノートル＝ダム小修道院（Notre-Dame de Bonnevaux [30.4.28b]、イゼールにあったシトー会のボンヌヴォー修道院とは異なる）に付属していた。このボンヌヴォー修道院はそれ自身が、サン＝リュフ（Saint-Ruf）修道会の保護下にあった。サン＝リュフはもともとはアヴィニオンにあったが、12 世紀にヴァランスに移っている。

クリーの聖母マリア生誕教会は、聖マルティヌスの聖遺物を所有していたとして多くの巡礼を集めたことでも知られる。そのため 17 世紀までは「クリーのサン＝マルタン教会」と呼ばれていた。1703 年 1 月にカミザールたちの襲撃によって大きな被害を受けた。その後、大がかりな修復工事が行われた。南側の 2 つの礼拝室が作られたのはその修復工事の際である。

西ファサードは、もともとの身廊部分（幅約 8.5 メートルで古い石積が残る）の南北両側に壁面が広げられている。向かって右側（南側）は、18 世紀のカミザールたちによる襲撃の後に増築された礼拝室に続くもので、セグメンタルアーチが架かる高さのあるニッチが付けられている。内部には鐘楼に登るための螺旋階段が作られている。向かって左側（北側）にも同様の



30.4.24 Église de Courry



30.4.24 abside

アーチが架かるが、こちらはニッチではなく身廊北側から後陣へとつながる通路となっており、このアーチはいわば大きなアルク・ブータン（フライングバットレス）として身廊部を支える役割を果たしている。この通路の奥（つまり後陣に近い身廊北側）には、細長い真正のアルク・ブータンが、隣に建っているかつての司祭館（現在は民宿）から 2 つ、身廊の扶壁に架けられている。なおその扶壁の間には、半円頭形の小さな出入口が開けられている。これは司祭が聖堂と司祭館の間を行き来するためのものであった。

西ファサードの中央下部に開けられた扉口は、半円アーチとなったアーキヴォルトが 1 つと、その中に方形の扉が開くというシンプルなものである。扉口の上には半円頭形の窓が 1 つ開けられ、現在は丸い時計がそこにはめ込まれている。一番上には鐘を吊すベイが 2 つ並ぶ 17 世紀のスマートな鐘楼が立つ。またこの西ファサードの扉口の向かって斜め右上には、建築物の屋根とそれを支える柱を描いた 17 世紀頃のトロンプ＝ルイユ（見せかけの絵、だまし絵）の一部が残されている。このようにファサードに絵が描かれている例は非常に珍しい。

身廊の南側はかつては墓地であった。1703 年のカミザールたちによる破壊の後で身廊南側にあたかも側廊のようにして、2 つの礼拝室と聖具室が作られた。礼拝室の外壁には扶壁が 2 つ付けられ、大きな窓も開けられた。聖具室の南壁には、それが建設された 1744 年という年号が印された石板がはめ込まれていたが、最近になって聖具室自体がより小さなものに改築されたために現在は見られない。その改築によって、後陣の南側を無惨な形で覆っていた聖具室の大きな壁が取り払われ、それによって後陣の南側の出張り（横幅のある扶壁）に開けられていた大きな丸窓も、あらためて目にすることができるようになった。

この後陣は、ロマネスク期のオリジナルの様子を最もよく見て取れる部分である。壁面は、整形された黄色味のある明るい色の石灰岩の切石が、比較的によくきっちりと積まれている。中央には、隅切りされた半円頭形のロマネスク様式の縦長の窓が開けられている（ただし修復されたものである）。後陣の屋根の下を巡るコーニスおよびそれを受けるモディオンには、ユニークな彫刻が並んでいる。モディオンは全部で 15 ある。無装飾のものや摩耗して判別不可能なものを除くと、南から北へと次のようなものが並んでいる。丸い玉飾り、牛の頭、向かい合った葉飾りのような図形、モンスターの頭、左右に葉を広げたパルメット、上下に並べられた円筒、俵形の円筒、玉飾り、牛の頭、大きな葉のパルメット、馬の頭。モディオンの上に巡るコ

ーニス部分を構成する横長の石のうち3つのものには、玉飾りがそれぞれ2つずつ並べて彫刻されている。後陣を巡るこのようなモディオンやコーニスの彫刻装飾については、例えばアルデッシュ県グラヴィエールのサン＝ヴィクトール教会（Saint-Victor de Gravières）の後陣のモディオンの複製であるなどと言われる（P.A.Clément）。同様にグラヴィエールの東およそ6キロのシャンボナスにあるサン＝マルタン教会（Saint-Martin de Chambonas）後陣のモディオン・コーニスのものと比較することもできるであろう。シャンボナスのものは13世紀初め頃に作られたとされるが、装飾の数、種類、そして質においてクリーのそれを上回るものである。いずれにせよ、こうした後陣彫刻の様式は、オーヴェルニュのものがヴレー地方を経由してこのあたりまで伝わったものである。

聖堂内部は18世紀以降、幾度となく加えられてきた修復・増築工事によって古い時代の面影はまったくない。2ベイからなる身廊、内陣、半円形の後陣が東西につらなり、身廊の南側には18世紀の礼拝室が2つ並ぶ。内陣の南側にはやはり18世紀の聖具室が作られている。先にも触れたように、この聖具室は最近になって小さなものに建て替えられた。身廊の天井は尖頭形ヴォールトで、第1ベイと第2ベイの間にはやはり尖頭形の横断アーチが架けられている。身廊とその南側の礼拝室は半円アーチによって隔てられ、身廊北側の側壁には各ベイに半円形の壁アーチが付けられている。第1ベイの上には鉄製の手すりの付けられたトリビューン（2階席）が1842年に作られている。第1ベイと第2ベイの間の横断アーチを受けるのは背の高い方形のピラストルであるが、第2ベイと内陣の間のいわゆる凱旋アーチを受けるのは柱頭彫刻を持つ太い壁付き半円柱である（ただし高さは低い）。

内陣には木製の祭壇（1970年）が置かれ、その東側の後陣には白大理石製の祭壇（1847年）が置かれている。内陣のヴォールトおよび後陣の半ドームにはフレスコ画（19世紀）が描かれている。後陣のそれは、天使たちに囲まれて雲の上に立つ神である。その手前の大理石製の祭壇には、キリストの磔刑を描いたやはり19世紀の絵画が飾られている。身廊南側の2つの礼拝室はともにほぼ正方形であるが、東側の「聖処女の礼拝室」の方が少し大きい。天井はともに交差ヴォールトである。

クリーには、コミューン域の北西端のアルデッシュ県との県境に位置する標高447メートルの小山の頂に、サン＝セバスティアン礼拝堂（Chapelle Saint-Sébastien）が建っている。聖母マリア生誕教会があるクリーの集落からは県道D304を北へ約2キロ行き、そこから1キロほど山道を徒歩で登る。小さな身廊と後陣、そして西ファサードに付けられた小ぶりの鐘楼など、遠くからだとも趣きのあるロマネスクの小礼拝堂のように見えるが、実際の建設は1722年で、その世紀の初めにマルセイユを中心に南フランスで猛威を振るったペスト禍の終焉を感謝してクリーの住民たちが建てたものである。その後この地方の巡礼地の1つとなった。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.268-270; Germer-Durand (1868) p.136; Goiffon (1881) p.171.
WS : « POP : la plateforme ouverte du patrimoine (Église de Courry) » ; « Courry-Clapas, L'Église de Courry (Gard) par Christian Talon ».

30.4.25 ペルマール／聖母の眠り教会 (Église de la Dormition, Peyremale)

ペルマールは、サン＝タンブロワから県道 D51 と D17 を通り、メランヌとベセージュを経由して西へおよそ 18 キロである。聖母の眠り (ラ・ドルミション) 教会は、セーズ川の大きな湾曲部分の内側 (南側) の山の上に建っている。現在の村役場の 100 メートルほど東にル・クロー (Le Claux) のロータリーがあり、そこからコミュニンの墓地に向けて細い道を 650 メートルほど登っていく。聖堂はその墓地に隣接している。なお「聖母の眠り」(La Dormition) とは聖母マリアの臨終のことで、キリスト教絵画などではしばしば題材にされるテーマである。

ペルマールの名は、1150 年にカストルムとして史料に現れる (castrum de Petra-mala)。中世の間はここにノートル＝ダム小修道院 (Prieuré Notre-Dame) があった。大革命まではユゼス司教区に属した。ユゼス司教はペルマールの封建領主でもあり、この地の世俗領主たちは司教に臣従していた。18 世紀初めには、この村出身のモワーズ・ボネ (Moyse Bonnet) がカミザールのリーダーの一人としてセヴェンヌ戦争を戦っている。彼は 1702 年 2 月にラ・ドゥヴェーズでカトリックを殺し、城を略奪している。

聖母の眠り教会は、この地方の片岩が積み重ねられて作られている。最初の建設は 12 世紀であるが、15 世紀以降に幾度も改築が重ねられ、古いロマネスク期のものは、内陣や後陣の一部、身廊壁面に残された窓の部分などに限られる。

高さのある西ファサードには、かつての切妻の頂部あたりに丸窓が開けられ、さらにその上に大きな方形の鐘楼が立つ。これは 18 世紀のものである。聖堂の平面プランはラテン十字形であるが、トランセプト様に身廊の南北に付けられた礼拝室もやはり 17 世紀から 18 世紀にかけてのものである。同じ時代に後陣の南側にも大きな礼拝室が増築されている。その後陣は半円形で、中央上部には隅切りされた半円頭形のロマネスク様式の窓が開けられている。

扉口は身廊第 2 ベイの南側に作られている。扉 (出入口) は、セグメンタル・アーチのポーチの中にあり、地上から 9 段の石段を登る。このアーチの上の身廊壁には、古いロマネスク様式の窓が残されている。窓を縁取る二重のアーチのうち、外側のアーチはクラヴォーによって組まれている。ただし、それが本当にロマネスク期のものなのかどうかは確かではない。

聖堂内部は古い石積みがそのまま残されていて、一見したところ古そうに見える。2 ベイからなる身廊の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトで、第 2 ベイと交差部 (かつての身廊第 3 ベイ) の間に架けられた横断アーチおよびそれを受けるピラストルは、非常に横幅があるものとなっている。第 1 ベイにはトリビューンが作られ、そのベイの南側に作られた石段から上がるようになっている。身廊と第 3 ベイの南北の礼拝室の間には尖頭アーチが架けられている。内陣 (後陣) は、12 世紀のロマネスク期のものである。凱旋アーチは上下の幅があり、その中央には隅切りされた半円頭形の小さな窓が開けられている。後陣は半円形で、半ドームが架かる。その中央部 (東端部) にはやはりロマネスク様式の窓が開けられている。聖堂内部には彫刻装飾の類いは見られない。

Bibliographie :

Germer-Durand (1868) p.162; Goiffon (1881) pp.213-214.

WS : « Base Mérimée (Église de Peyremale) »

30.4.26 ジェノラック／サン＝ピエール教会（Église Saint-Pierre, Génolhac）

ジェノラックは、アレスから県道 D128 と D906 を北へ約 40 キロである。サン＝タンブロワからだとベセージュを経由するルート（D51 と D156）を北に向かって 32 キロである。コミューンの西側はロゼール県と接する。サン＝ピエール教会は村の北寄りの場所に建っている。ジェノラックの村を南北に貫く県道 D434 の西側に平行する「教会通り」（rue de l'Église）沿いに後陣が面している。

ジェノラックは中世の間、オーヴェルニュとラングドックを結ぶいわゆる「レゴルダヌの道」（Chemin de Régordane）の重要な中継地の 1 つであった。E. Germer-Durand によれば、村の名は 1176 年の史料に現れ（Ginolacum）、また 1199 年には城塞として記録されている（Castrum de Genouillac）。1211 年に国王フィリップ 2 世（オーギュスト、在位 1180-1223 年）がユゼス司教による領有を認めて以来、大革命までこの村はユゼス司教区に属した。しかしこの地はユゼス司教とともに幾人もの共同領主によって分割領有された。13 世紀にはアンデューズ家がそのうちの 1 つであった。またジェヴォーダンのランドン（Randon／Chateauneuf-de-Randon）家は、1312 年に、この地にドミニコ会（ジャコバン）修道院を創建している。この修道院は 16 世紀の宗教戦争の際にプロテスタントによる攻撃の的となり、1562 年にはジェノラックの村とともに大きな被害を受けた。さらに 1703 年にはカミザールたちが村を襲い、その際には村に駐留していたカトリックの国王軍兵士が殺され、ドミニコ会修道院のみならず、サン＝ピエール教会も火をつけられている。なおドミニコ会修道院はその後プロテスタントの寺院となった（ジェノラックの村の南側にある）。

サン＝ピエール教会は 12 世紀半ばに建設されたが、その後に幾多の改築・改修を経ており、古いロマネスク期の面影は少ない。後陣は平面形で、近代になってからの開口部が上下 3 段構えで並んでいるが、そのいくつかは塞がれている。身廊には 14 世紀になって南側に礼拝室が作られた。その外壁には扶壁が付けられ、その扶壁の間に隅切りされた縦長の窓が開けられている。西ファサードは、鐘を吊すベイが横に 4 つ並ぶ高さのある鐘楼壁で、その様子が「櫛」に似ていることから「櫛形鐘楼」（clocher-peigne）とも言われ、ヴィヴァレーからジェヴォーダンあたりでよく見られるものである。西ファサードが鐘楼壁でありかつ上部が横 4 連式の「櫛形鐘楼」のものは、この近くではオジャック（Aujac [30.4.27]）やボンヌヴォー（Bonnevaux [30.4.28a]）あるいはコンクール（Concoules [30.4.31]）がそうであるし、ジェヴォーダン（現ロゼール県）においては、例えばサン＝レジェ＝デュ＝マルジュ（Saint-Léger-du-Malzieu [48.1.5]）、リメーズ（Rimeize [48.1.12]）、プランスエジョル（Prinsuéjols [48.2.10]）、アラン（Allenc [48.4.13]）などを挙げることができる。それらの鐘楼壁はもちろんロマネスク期のものではなく、もっと



30.4.26 Génolhac

後の 14-15 世紀あるいはそれ以降のものである。ここジェノラックのものは 1562 年にプロテスタントによって被害を受けた後に作られたものである。この鐘楼壁の中ほどの高さの所に、隅切りされた半円頭形のロマネスク期の窓が残されている。また鐘楼壁の下には半円頭形の開口部が付けられている。かつては出入口の 1 つであったと思われるが、今はステンドグラスがはめられた大きな窓となっている。

身廊の南西端にはポーチ状の大きなアーチの中に扉口が開く。アーキヴォルトは、五重のヴシュール（半円筒形であったり細いモールディングの付いたものなど）からなり、さらに一番外側には半円筒形のヴシュールが架けられている。内側の 5 つのヴシュールは、左右においてそれぞれ冠板と柱頭彫刻の付いた側柱（円柱と方形柱）が受け止める。一番外側のヴシュール（細いモールディングが束ねられたもの）を受け止めるのは冠板と柱頭彫刻のみで、柱自体は側柱のような方形の石組みである。

聖堂内部は、近年になってからの修復によって壁面がきれいに上塗りされ、古さはまったく感じられない。主身廊の第 2 ペイと第 3 ペイの南北両側には側廊様の礼拝室が作られている。身廊の天井は尖頭形のトンネル・ヴォールトで、第 1 ペイと第 2 ペイの間に尖頭形の横断アーチが架かる。第 1 ペイには 2 階席が作られている。

Bibliographie :

Clément (1993) p.284; Germer-Durand (1868) p.99; Goiffon (1881) pp.136-137.

30.4.27 オジャック／サン＝マルタン教会 (Église Saint-Martin, Aujac)

アレスからオジャックに向かう場合、サン＝タンブロワを経由して東側からアクセスするのなら、県道 D904 と D51 で約 48 キロ、ラ・グラン＝コンブを経由して国道 N106 と山の中に連なる峠道を通る県道 D906 を北へ向かうと約 45 キロである。クルマの場合、前者のルートに行くのがスムーズである。ジェノラック [30.4.26] からは県道 D134 で東へおよそ 10 キロである。

オジャックはセヴェンヌの山中にあって、現在ではガール県、アルデッシュ県、そしてロゼール県の 3 つの県境が交わる地域にあたる。古くからユゼス司教区に属し (Aujacum)、この地にあったプリウレは、ヴァランスのサン＝リュフ修道院の管理下に置かれていた (オジャックの司祭はサン＝リュフが任命し、ユゼス司教がそれを承認していた)。このプリウレの付属聖堂であったサン＝マルタン教会のもともとの建設は、クリー [30.4.24] と同じくボンヌヴォー (Notre-Dame de Bonnevaux [30.4.28b]) の修道士たちによるもので、ボンヌヴォー小修道院自体がサン＝リュフの傘下にあったのである。



30.4.27 Saint-Martin d'Aujac

サン=マルタン教会は、オジャックの集落の南側にあつて、村役場（mairie）に隣接している。最初の建設は10世紀にさかのぼるとも言われる。現在の建物は12世紀中頃から後半にかけて建てられたものである。北側からアクセスすると、最初に目に入るのは、西ファサードの高さと幅のある大きな鐘楼壁である。1480年の大規模な修復・改修工事の際に作られたもので、整形された砂岩の中石材が規則正しく積まれ、壁面には中央に丸窓が1つ開けられているだけである。一番上には鐘を吊す半円頭形のベイが4つ横に並ぶ。ジェノラック（Génolhac[30.4.26]）やコンクール（Concoules [30.4.31]）のものと同じ「櫛形鐘楼」（clocher-peigne）である。

扉口は身廊部第1ベイの南側に開けられている。半円形のアーキヴォルトは、一番外側にクラヴォーがきれいに並べられた大きなアーチが架かり、その内側に2つの半円形ヴシュールが、段々に内側に向けて後退する形で架けられている。その2つのヴシュールのうち、最も内側のものには半円筒形の凸型モールディングの部分に、向かって右側には半球形の玉飾りが3つ、また左側にはつぼみのような線刻が付けられた玉飾りが4つ並べられている。そのヴシュールの頂部にある要石にはまるで蝶ネクタイのリボンのような飾り（鳥が向かい合っているとも言われる）と、その右隣のクラヴォーにはハンマーのような形の飾りが彫刻されている。この内側のヴシュールが載せられているのは横に長くて太い無装飾のリンテルである。一枚岩であるが、向かって右寄りの所に亀裂が入っている。このリンテルをインポストを介して受けるのは、やはり太くて無装飾の方形の側柱である。

一方、外側のヴシュールには円筒形のモールディングが付けられている。このヴシュールは左右において、水平のインポストを介して柱頭彫刻の付けられた小柱が受け止める。向かって右側のものは円柱、左側のものは六角形であり、ともにその柱礎にはトルスが付けられ、台形状の基壇の上に立てられている。注目すべきはその柱頭彫刻である。右側（東側）のものは、二段構えになって上に向けて吹き上がるアカンサス様の大葉である。その葉脈は太く、葉先にはヴォリュートのような丸い実が付けられている。それに対して左側（西側）のものは、大きな頭の男（顔の半分以上は破損している）が体を水平に伸ばし、左腕を背中後ろに回して動物らしきもの（ライオンか？）を押さえている。その腕の上には葉脈の太い大葉が広げられている。一方、肘を曲げた右腕は、大きな目を持った厳めしい表情のサルのような動物につかまれて、その指先を噛まれている。

扉口のすぐ東側には、横幅のある扶壁が付けられ、身廊の第2ベイにあたる位置に切妻屋根の礼拝室が建てられている。1480年に増築されたものである。この礼拝室の西壁には非常に先が尖った尖頭形のニッチ、南壁には縦長の方形の窓とその上に半円頭形のニッチがそれぞれ付けられている（北壁には何もない）。これらのニッチはかつては開口部であったの



30.4.27 chapiteau

かも知れない。この礼拝室の東側は再び横幅のある扶壁をへて、身廊部よりも低くなった内陣部分の出張り（方形の窓が開けられている）、そして最後に後陣が続く。

後陣は半円形で、壁面は部分的に破損しているが、中石材を主体として規則正しく積まれたものである。中央には銃眼のような細くて縦長のロマネスク様式の窓が開けられている。半円形のその頭部は大きなモノリスで、クラヴォーを表す線刻が施されている。後陣の南側には15・16世紀以降に開けられたと思われる方形の窓がある。聖堂の北側にはかつての聖具室と司祭館が接続しており、身廊北側の壁面を直接目にはすることはできない。聖具室と司祭館は現在は村役場となっている。1480年に南側の礼拝室とともにトランセプトを形作るかのようにして増築された身廊第2ベイ北側の礼拝室は、外側が一般の住居のように変えられてしまっていて、それが聖堂の一部であるとは一見して分からない（内部の礼拝室は残されている）。

聖堂の内部は単身廊形式で、2ベイからなる身廊の東側に内陣と後陣が続く。南側に扉口が開く第1ベイにはトリビューン（2階席）が作られ、そのベイの西壁にはそこに上がるための階段が設けられている。身廊および内陣の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。ベイを区切る横断アーチも半円形で、柱頭彫刻を持つ壁付き半円柱が受ける。第2ベイの南北にはそれぞれ1480年に礼拝室が作られているが（聖母マリアの礼拝室と聖ヨセフの礼拝室）、身廊側に面した半円アーチの高さおよび、天井のヴォールトの起拱点に水平に付けられたコーニスの位置が、第1ベイのものとともに、内陣の側壁に付けられた半円形ニッチのアーチおよびその上のコーニスよりも高い位置にある。したがって横断アーチを受ける壁付き半円柱も、第1ベイ西側のものと第2ベイ西側のものは、内陣の西側のもの（つまり凱旋アーチを受け止める半円柱）よりも高く、柱頭の位置もやはり高い。

第2ベイを取り囲むようにして4隅に付けられている（ただし高さは違う）それらの柱頭彫刻はすべて植物文様であるが、内陣に接するものは二段構えになったアカンサス風の葉飾りで、葉柄と葉脈（主脈）が太く、中央の葉は側縁が先端で小さなヴォリュート（渦）となっている。それらのヴォリュートの上には小さなブロックを介して冠板が載る。北側のそれは角部の葉の先端に丸い実を付けている。冠板はそのままヴォールトの起拱点に連なる水平のコーニスとなって後陣にまで巡る。

第1ベイのトリビューンに接する柱頭は、同じモチーフでも線刻によるいっそう図形的な図柄である。北側のものは二段構えとなったいくつかの葉飾りの、それぞれの葉先に渦巻き文様の彫刻された小さな方形のブロックが置かれ、その上に冠板が載る。南側のものもやはり二段構えの葉飾りであるが、上段では中央から左右に向けて茎が大きく広がり、柱頭角部の先端において丸い実を結んでいる。その実の上はやはり小さな方形のブロック（無装飾）で、さらにその上に冠板が載る。冠板はヴォールトの起拱点に水平に連なるコーニスに接続する。このコーニスは内陣から後陣に巡るものよりも高い位置に付けられている。

凱旋アーチの東側には祭壇の置かれた内陣が続き、その南北は半円形アーチの架かる大きなニッチとなっている。ただし南側にはアーチの下に方形の窓が開けられている。内陣のさらに東側は半円形の後陣である。水平のコーニスの上には半ドームが載る。後陣の中央（東端）には隅切りされた半円頭形の縦に細長い窓が開けられており、黄色い輪が連なるデザインのステ

ンドグラスがはめられている。後陣の南側には、隅切りされた大きな方形の窓が開けられているが、これはすでに触れたように、15-16 世紀以降のものと思われる。反対側の後陣北側には、19 世紀になって作られたかつての聖具室への出入口が作られている。この聖具室は現在はオジャックの村役場の一部となっている。

サン=マルタン教会から東へおよそ 1.5 キロ行った標高 600 メートルの山の上にはシェラル城（Château de Cheylard）がある。12 世紀半ばに建設が始まり、最初は人工的なモットの上に 20 メートル高さの方形の塔（ドンジョン）が立つ防御施設であったが、13 世紀になるとそこに 2 つの居館が付け加えられた。14 世紀には南西角に大きな円塔が作られた。所有者はアンデューズ家からランドン家になり、さらにその後、ラ・ガルド=ゲラン（La Garde Guérin、現ロゼール県）の領主の一人であるアルトール・ドゥ・キュビエール（Artaud de Cubières）がこの城を手に入れ、18 世紀の大革命前までその子孫が所有した。その後は国有財産として売却され、それを購入したこの土地の裕福な農家であったリガル家が代々の所有者となって今日に至る。城全体のプランは方形で、城壁の中の北西部分に内庭があり、その東側と南側を塔と居館が囲み、南西角に大きな円塔が建てられている。円塔の上部および居館の東側の外壁の上に並ぶ、防御施設を支えるコルボーの列が印象的である。メインゲートは南側の居館に作られている。またその居館の壁にはルネサンス様式の四角くて大きな窓が 4 つ開けられている。シェラル城は、サン=マルタン教会とともに 1949 年に歴史的建造物（monument historique）に指定され、今ではリガル家の子孫が保存協会を設立するとともに、夏期には多くの観光客を受け入れている。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.262-263; Dumas (2009) pp.173-200; Germer-Durand (1868) p.15; Goiffon (1881) p.28; Moreau (1997) pp.34-35; Werth (2013) p.96; RIP.

30.4.28a ボヌヌヴォー／サン=テオドリ教会（Église Saint-Théodorit, Bonnevaux）

ボヌヌヴォーは、オジャックから県道 D320 で北へ約 5 キロである。ガール県、ロゼール県、アルデッシュ県の県境が交わるセヴェンヌの中にあつて、オート=ヴァレー=ドゥ=ラ=セーズ（Haute Vallée de la Cèze）の美しい山々に囲まれた、標高 724 メートルの小さな集落である。

サン=テオドリ教会は、この集落の住居が集まる斜面の一番上（集落の北端部）に建つ。建設は 11 世紀で、壁面はこの集落の家々と同じくこの地方の平たい片岩を積み重ねて作られている。西ファサードは、遠くからでもすぐに目につくような高い鐘楼壁で、上部は鐘を吊す半円頭形のベイが 4 つ並ぶ「櫛形鐘楼」（clocher-peigne）となっている。これは 15 世紀に作られたもので、このタイプの鐘楼壁は、この地域ではジェノラック（Génolhac [30.4.26]）やオジャック（Aujac [30.4.27]）、そしてコンクール（Concoules [30.4.31]）などに見られるものである。鐘楼壁の中ほどの高さの所には丸窓が開けられ（隅切りはされていない）、その下の中央から向かって少し左寄りの所に半円頭形の扉口が作られている。幾重にも重ねられた半円形のヴシュール（半円筒形のモールディングや方形のものなど）がそのまま側柱となって地上まで



30.4.28a Bonnevaux



30.4.28a tête d'homme

下りている。このヴシュール自体は無装飾であるが、この扉口の左右やその上の鐘楼部分、さらに鐘楼壁の南面から身廊の外壁にかけて、筆者が確認できただけで 10 人の人物の頭の彫刻が埋め込まれている（そのうち鐘楼壁南面の 2 つは破損して顔が失われている）。伝説によれば、これらの人物はそれぞれボンヌヴォーを拠点としてこの地方で布教活動に身を捧げ、聖堂を建てた修道士たちであるという。

身廊北側は、鐘楼壁北側を支えるようにして隣接する墓地との間にアルク・ブータン（フライングバットレス）が架けられている。内陣の北側には大きな側室（聖具室）が作られている。一方、身廊南側は、斜面に建っていることもあって壁の高さは高い。扶壁も 2 つ付けられ、第 2 ペイの部分は全体的に張り出している。後陣も身廊部と同じ高さである。南側に扶壁が付き、身廊の扶壁との間に半円頭形の窓が開けられている。後陣の中央には開口部はない。身廊部と後陣、そして身廊北側に作られた側室（聖具室）の屋根は、板石をきれいに並べた見事なものである。

聖堂内部は 2 ペイからなる身廊に内陣のペイが続き、それはそのまま半円形の後陣となる。身廊の天井はわずかに尖頭形となったトンネル・ヴォールトで、そこに架かる横断アーチもゆるやかな尖頭形である。第 1 ペイの西側にはトリビューンが作られていて、その下は一種のナルテクスのようにになっている。それを支えるのは 2 本の円柱と 3 つのアーチである。扉口的位置に合わせて、それらのアーチは南側のものから北側のそれへと少しずつ小さくなっている。扉口から中に入ってすぐのところ（つまり鐘楼壁の内側）にトリビューンに上がるための石段が作られている。トリビューンの西壁に開けられた丸窓は、内部に向けて大きく隅切りされている。第 1 ペイの東側の南北の側壁には大きな壁アーチの中に隅切りされた半円頭形の窓がそれぞれ開けられている。

身廊第 2 ペイの側壁には、南北ともに奥行きのある壁アーチが付けられ（小礼拝室とも言える）、その上にはヴォールトの起拱点に付けられた水平のコーニスを遮る形で、やはり隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。南側の壁アーチの中には上の方に隅切りされた丸窓があ

る。内陣の南北にも半円形の壁アーチが付けられ、北側のその下には側室（聖具室）への扉が付けられ、その扉の上には隅切りされた半円形の窓が開く。南側の壁アーチの下にも同様の窓が開けられているが、これらの窓の隅切りの下辺部は大きな石段状に作られている（特に南側のそれ）。内陣に続く後陣部分には木製の祭壇が置かれている。水平のコーニスの上には半ドームが載る。後陣中央部分には窓はない。

聖堂内部は彫刻装飾の類いは見られないが、1990年代に入って壁面の漆喰などが取り除かれ、片岩を主体に作られたかつての壁面が復活して、山岳地方特有の多少とも荒々しい雰囲気を感じ取れるようになっている。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.261-262; Dumas (2007) pp.39-43, pp.90-108; pp.250-253; Germer-Durand (1868) p.30; Goiffon (1881) pp.56-57.

30.4.28b ボンヌヴォー／ノートル＝ダム小修道院

(Prieuré Notre-Dame de Bonnevaux, Bonnevaux) 遺構、privée

ボンヌヴォーのノートル＝ダム小修道院（プリウレ、文献によってはアベイ« abbaye »とされることもある）は、ボンヌヴォーの集落から県道 D320 を北へおよそ 2.8 キロの山中にある。県道 D320 の« Pont de l'Abadié »と呼ばれる橋のたもとにあるゲートを入れてさらに 100 メートルほど北に向けて山の中を行くとプリウレに至る。その創建について正確なところは分らないが（E. Germer-Durand はそれを 9 世紀としている）、ヴァランスのサン＝リュフ修道院（1158 年にアヴィニオンから移った）が 12 世紀後半にボンヌヴォーの地を獲得し、山間の谷であるここにプリウレを営んだ（今のイゼール県にあったシトー修道会のボンヌヴォー修道院と混同してはならない）。このプリウレは、同じボンヌヴォーの集落にあるサン＝テオドリ教会 [30.4.28a] を所有していた。またクリーの聖母マリア生誕教会 [30.4.24]、オジャックのサン＝マルタン教会 [30.4.27] などその傘下に収めていた。しかし 16 世紀に入って宗教戦争の争乱の中、1560 年に修道士たちはヴァランスに退去する。1723 年には完全に放棄され、それ以降は廃墟化した。

現在、このプリウレの遺構は私有地となっていて訪れることはできない。現在の所有者によって部分的に修復が行われているようである。敷地の外側からわずかに見えるのは、再建された修道院居館、壁面だけが残る修道院教会、その南側に作られた四角いクロワトル（内庭回廊）である。クロワトルには半円形の小アーチを内側に組み込んだ大きなアーチが連なるアーケードが修復されて残されている。

Bibliographie :

Auguste (1929) pp.113-167; Clément (1993) p.261; Dumas (2007) pp.38-80; Germer-Durand (1868) p.30; Goiffon (1881) pp.56-57.

30.4.29 マロン=エ=エルズ／サン=ピエール教会 (Église Saint-Pierre, Malons-et-Elze)

マロン=エ=エルズは、ジェノラックから県道 D906 を北へ 10 キロ行き、ル・マルティネから D155 をさらに北へ 10 キロである。アレスからだとは D904 と D901 で約 60 キロ、ロゼール県のヴィルフォールからだとは D901 で 13 キロ、またアルデッシュ県のレ・ヴァンからだとはやはり D901 で 17 キロの距離がある。セヴェンヌの山中にあって、ガール県の最北端に位置するコミューンである。かつてエルズはロゼール県のプルシャレスのコミューンに属していたが、1816 年にマロンとエルズが合併して現在のマロン=エ=エルズとなった。

1120 年、アレスの領主ベルモン・プレ (Bermond Pelet) が、サン=ピエール教会をコンクのサント=フォワ修道院に寄贈している (ecclesia Sancti Petri Malonensis)。しかしほどなくユゼス司教の所有となったようで、大革命まで教区としてはユゼス司教区に属し、グラヴィエール (Gravières／現アルデッシュ県) の主任司祭の管理下にあった。またボンヌヴォーを介してヴァランスのサン=リュフ修道会の勢力圏に入っていた。

サン=ピエール教会の建設はロマnescク期にあたる 12 世紀のことである。2 ベイからなる単身廊形式で、その東側に内陣と後陣が続く。19 世紀半ばの 1855 年に修復が行われるとともに、身廊第 2 ベイの南北にそれぞれ新たに礼拝室と、第 1 ベイ北側に聖具室が増築され、1859 年 4 月 21 日に再献堂された。建物の壁面は中石材がラフに積まれている。ただし増築された礼拝室の北側の壁面および後陣の土台部分は片岩による不規則な乱積みである。

身廊部第 1 ベイには南側に張り出した前室 (avant-corps) があり、その前室のやはり南側に鐘楼壁が立ち上がる (鐘楼も南側を向いている)。この鐘楼壁は下から上へと段々に小さくなってゆく形になっており、一番下の段には前室の扉口が付けられ、その左右両側には垂直の扶壁が付く。この扉口は方形で、石段を 4 つ上ったところに入口がある。左右の側柱の上にはコンソールに受け止められたリントルが載り、その上は半円アーチのヴシュールの中にギリシア十字が彫刻されている。これは 12 世紀の聖堂建設の際に、この近くのル・サルゼ (Le Salzet) に領地を持っていたテンプル騎士団 (後に聖ヨハネ病院騎士団に接収) から受けた財政的支援などの証しなのかも知れない。この扉口のさらに上には丸窓が開けられ、一番上の段には鐘を吊すベイが 2 つ並ぶ。鐘楼の頂部は水平である。鐘楼壁の東側には 19 世紀に増築された礼拝室の外壁が続く。壁面中央には半円頭形の窓が開けられている。



30.4.29 Saint-Pierre de Malons

内陣部の外壁には内外に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が、南北それぞれに開けられている。扶壁を介して内陣の東側に続く半円形の後陣は、ボンヌヴォーのサン=テオドリ教会 [30.4.28a] のように身廊部と同じ高さがある。ただしこちらは中央 (東端) の高い位置に、隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。また南側にのみ半円頭形のロマnescク期の小さな窓が開けられている。この窓は、内部に

向けては大きく隅切りされているが、外側に隅切りはない。その代わり、アーチ部分が円筒形モルディングに縁取りされ、それをさらに基壇の上に立ち柱頭彫刻を持つ小柱が受け止める。向かって右側の小柱は捻り柱で、その柱頭はかなり摩耗しているが大きく広がった葉飾りである。一方、左側の小柱の柱身は方形で、その柱頭はこれもまた摩耗が進んでいるが、角部にモンスター（あるいは人間）がうずくまった姿が彫刻されている。冠板には大きな丸い実が並んでいる。開口部の両側にこのような柱頭彫刻を持つ柱を立てるやり方は、オジャックのサン＝マルタン教会〔30.4.27〕の扉口を想起させる。

西ファサードの壁面は片岩の荒積みである。低い位置に半円頭形の窓と、高い位置に丸窓が開けられている。この丸窓のすぐ下には、かつてこの西壁に接続していた建物の切妻屋根の痕跡が残されている。

南に向いた鐘楼壁の扉口から中に入ると、さらに石段を5段登ったところに聖堂身廊部に直接作られた扉口（前室のそれと同じ形のもの）がある。これはももとの古い扉口なのであるが、そう考えると、鐘楼壁とそれが付けられた張り出しの前室は、古い扉口の外側に後から作られた大きなポーチとなっているのだと言える。

聖堂内部は単身廊形式で、身廊は2ベイからなる。天井には水平のコーニスの上に半円筒形トンネル・ヴォールトが載り、ベイを区切る半円形の横断アーチが架けられている。その横断アーチは柱頭彫刻を持つ壁付きの半円柱が受け止める。第1ベイと第2ベイの間に見られる柱頭彫刻は、太い葉脈を持つ大葉が上に向けて広がるものであるが、デザインは図形的である。第2ベイと内陣の間（すなわち凱旋アーチを受け止める柱）にある柱頭彫刻は、南側のものはやはり同じような大葉文様であるが、葉先に丸い実を結んでいる。またそのすぐ斜め下の壁アーチのインポストには組紐文様が彫刻されている。この柱頭に向かい合う北側の柱頭には、その角部に大きく羽を広げた鳥（ワシ）が2羽彫刻されている。南西角の鳥は左右の羽を下に向けており、体の羽毛の小さな菱形の模様までしっかりと刻まれている。ただし頭部は破損している。一方、南東角にいる鳥は、体の羽毛は刻まれていないが、丸い目を見開き、左右の両羽を上大きく広げている。この2羽の鳥は、ともに柱頭下部の円形のアストラガルを、太いかぎ爪でしっかりとつかんでいる。

身廊第1ベイの西壁には半円頭形の窓が開けられてステンドグラスがはめられているが、この窓の下には床面から何段かの石段が残されており、さらにまた窓の上にはクラヴォーが組まれた半円形のアーチが残されていることから、かつては修道士のための出入口であったとも思われる。身廊の南北の側壁には半円形の壁アーチが付けられている。第2ベイの南北それぞれには、東西に長いセグメンタルアーチを介して19世紀の礼拝室が作られている。その



30.4.29 chapiteau

天井はともに交差ヴォールトである。またそれぞれ西側の壁に大きな方形のニッチが付けられており、外側に向けた壁には半円頭形の窓が開けられている。

東西幅の狭い内陣にも側壁に半円形の壁アーチが付けられ、半円頭形の隅切りされた窓が開けられている。半円形の後陣には水平のコーニスの上に半ドームが架かる。その半ドームの中央に半円頭形の大きな窓が開けられている。また後陣の南側にも内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。先にも触れたように、この窓の外側は左右を柱頭彫刻の付けられた小柱にはさまれている。後陣内部の壁面は、中央から向かって左寄りの部分とそれ以外の部分の石積みの様子が異なる。左寄りの部分は整形された中石材の規則的な石積みであるが、右側は片岩の乱積みとなっている。

Bibliographie :

Buholzer (1962) p.134; Clément (1993) pp.263-265; Devic et Vaissète (1875) ch. 471; Germer-Durand (1868) p.76, p.121; Goiffon (1881) p.116, pp.158-159.

30.4.30 ポンテューユ=エ=ブレジ／ノートル=ダム教会

(Église Notre-Dame, Pontails-et-Brésis)

ポンテューユ=エ=ブレジのコミューンのうち、ノートル=ダム教会のあるポンテュー地区は、ジェノラックから北へ向けて県道 D906、D155、D51、そして D313 を通って約 14 キロである。ロゼール県との県境までは、セーズ川 (la Cèze) 沿いに西へ向かって約 4 キロの位置にある。

ポンテューユはマロン=エ=エルズと同じく、大革命まで教区としてはユゼス司教区に属した。ユゼス司教はポンテューユの領主でもあり、在地領主たちはユゼス司教に臣従していた。ノートル=ダム教会はグラヴィエール (Gravières／現アルデッシュ県) の主任司祭の管理下にあったが、ボンヌヴォーを介してヴァランスのサン=リュフ修道会の勢力圏に入っていた。ポンテューユとブレジが合併したのは 1812 年のことである。

ポンテューユの集落は、セーズ川から県道 D313 を 2 キロほど北に向かった丘陵の上にあり、ノートル=ダム教会はその集落のほぼ中ほど (村役場のすぐ南) に建っている。尖塔が載った方形の鐘塔が遠くからでもよく見える。この鐘塔は、3 ベイからなる身廊に平面形の後陣が続く東西に長い聖堂の西端に付けられた、いわば鐘塔ポーチである。これは 14 世紀にサン=シャフル (オーヴェルニュ、今のオート=ロワール県) の修道士たちによって建てられたものである。上下二段からなり、下段はその西側に太くて頑強な扶壁が放射状に付けられ、東・西・南面に尖頭形のアーチが架けられている。西面にはアーチの中に方形の枠が作られて隣接する墓地との出入口となっている。鐘塔の上段は、西面と南面には鐘を吊す半円頭形のベイが 2 つ並べて開けられているが、東面と北面にはベイはそれぞれ 1 つずつである。

鐘塔ポーチの東側すなわち西ファサードには、身廊に入るための扉口がある。聖堂が斜面に建てられているので、北側からは数段の石段を下りることになる。この扉口はロマネスク期のもので、三重の大きなヴシュールからなるアーキヴォルトが架けられている。3 つのヴシュ

ルのうち、真ん中のものには円筒形のモールディングが付けられている。ヴシュールはそれぞれ組石が3つ重ねられた高さの低い側柱がインポストを介して受け止めている（向かって一番右側の側柱は、鐘塔ポーチ南側のアーチの側壁の中に埋め込まれてしまっている）。このアーキヴォルト（3つのヴシュール）を受けるインポストのうち、向かって左側のものすべてと右側の中央のものには、先の尖った葉模様（あるいは三角形の連続文様のようにも見える）が彫刻されている。



30.4.30 Notre-Dame de Pontails

身廊第1ベイの南側の側壁には丸窓の下に半円頭形のアーチが架けられた小さな出入口が作られている。これはかつてはここにあったブリウレの修道士たちが出入りするものであったと思われる。その出入口の東隣に付けられた扶壁の上には、小ブロック状の古い彫刻装飾の一部が残されている。東端の後陣は平面形である。その壁面の左右には、中ほどの高さの所に縦長の半円頭形の窓が1つずつ開けられている。その窓の頭部と側柱はすべて一枚岩のモノリスである。隅切りはされていない。この後陣の様子は、あたかもシトー修道会のそれを連想させるものでもある。

聖堂内部は身廊が3ベイからなり、その北側には14世紀以降に増築された側廊と聖具室が並ぶ。東端はほぼ正方形の内陣で、後陣は平面形である。聖堂内部は、横断アーチとそれを受けるピラストルや側壁に付けられた半円形の壁アーチ以外は、壁面が漆喰で白く上塗りされていて古さはあまり感じられない。身廊の天井は半円筒形トンネル・ヴォールトで半円形の横断アーチが架けられている。その横断アーチを受ける柱の柱頭彫刻には大葉や渦巻きの付く線刻状の植物文様が彫刻されている。後陣（東壁）の左右には縦長で半円頭形の窓が開けられている。

ポンテユのノートル＝ダム教会は、現在はカトリックの祭儀以外にも、コンサートや各種文化イベントなどに使用されている。

Bibliographie :

Clément (1993) p.167; Germer-Durand (1868) p.168; Goiffon (1881) p.218.

30.4.31 コンクール／サン＝テティエンヌ教会 (Église Saint-Étienne, Concoules)

コンクールへは、ジェノラックからセヴェンヌの山間部を縫うように通る県道 D906 を北へおよそ7キロである。サン＝テティエンヌ教会は、D906 から別れてコンクールの集落を縦断する旧道である D315 沿いにある、集落の南端に位置する。D906 をそのまま北へ向かうと約3キロでロゼール県との県境となる。

1176年のフランクヴォー修道院 (Abbaye de Franquevaux) のカルチュレールにその名

(Concolas) が現れる。大革命まではユゼス司教区に属し、グラヴィエール (Gravières / 現アルデッシュ県) の主任司祭の管理下にあった。サン＝テティエンヌ教会はこの地にあったプリウレの付属聖堂である (プリウレの院長はコンクルの領主の一人でもあった)。その建設は 11 世紀後半あるいは 12 世紀前半である。18 世紀初めの 1703 年 1 月にカミザールたちの襲撃を受けて司祭館とともに焼かれ、その後に修復・再建された。したがってロマネスク期のものは西ファサードの下半分とそれに続く身廊の 2 つのベイだけである。身廊第 2 ベイの南北に作られた礼拝室は 17 世紀のもので、19 世紀には聖堂を拡張するために、残念なことにロマネスク期の古い内陣と後陣が取り壊されてしまい、身廊部よりも高さが加えられたうえで新しく作り直された。

聖堂は後陣が東ではなく南東方向に向く形で建てられている。西ファサードはもともとは身廊とほぼ同じ高さの切妻形のものであったが、13 世紀になって高さが加えられて鐘楼壁となり (壁面の石積みの様子が下半分と異なって整形された中石材が規則正しく積まれている)、さらにその後の時代、おそらくは 15 世紀頃までに、鐘を吊す半円頭形のベイが 4 つ横に並ぶ櫛形鐘楼 (clocher-peigne) が一番上に作られた。ガール県北部からロゼール県にかけてしばしば見られるタイプの鐘楼である。このファサードの下には扉口が開く。扉の上には、長さのある 10 のクラヴォーが大きなアーキヴォルトを形作る。ただしアーチの頂部の 2 つのクラヴォーには楕円形の小窓が開けられていて、それがこのアーキヴォルトの美しさを損ねている。扉口の向かってすぐ右隣には半円頭形のニッチが付けられている (こうした仕様は珍しい)。また扉口の上、すなわちかつての切妻のすぐ下の位置には二重のアーチが架けられた半円頭形の窓が開けられている (隅切りはされていない)。12 世紀のものである。この窓の周囲、特に窓のすぐ上の石積みは小石材が主体で、それらの石材の間には小穴がいくつも開けられている。なおこの鐘楼壁の裏側 (東面) には、城塞建築でよく見かけるコルボーが横一列に並んでいる。通常は防御用のマシクリを支えるために作られるが、ここでは木製の通路を作るためのものである。

身廊第 2 ベイの南北に作られた 17 世紀の礼拝室は、外部は南北ともに切妻屋根で、半円頭形の窓が壁面の低い位置に 2 つずつ開けられている。外側は隅切りされていないが、礼拝室内部に向けては隅切りされている。19 世紀に再建された内陣・後陣は、身廊よりも高さがある。後陣は内陣部も含めて五角形となっており、東面と南北の面にそれぞれ隅切りされた大きな半円頭形の窓が開けられている。内陣の北側にはやはり 19 世紀の聖具室が作られている。

聖堂内部は 2 ベイからなる身廊に、内陣・後陣が続く。身廊部は修復の手は入っているものの、ロマネスク期の面影を今によく伝えるものとなっている。第 1 ベイには側壁の半円形の壁アーチを遮る形でトリビュン (2 階席) が作られているが、これは 17 世紀のものである。トリビュンの西壁 (つまり西ファサードの内側) には内部に向けて隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられて採光の役割を果たしている。身廊側壁に水平に付けられたコーニスの上には半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かる。特に第 1 ベイのそれは 12 世紀のオリジナルのものである。身廊西端の横断アーチと、第 1 ベイと第 2 ベイを区切る横断アーチはともにわずかに尖頭形である。そのうち後者は柱頭彫刻を伴った壁付きの半円柱が受け止める。南側のもの

のは摩耗が進んでいるが、アストラガルの上に葉脈（主脈）の太い大葉が上に向けて広がり、柱頭の角部には丸い実が付けられている。それに対して北側の柱頭は南側のものよりも大きく、アストラガルの上にやはり主脈の太い大葉が広がり、葉先には丸いヴォリュートが付けられている。さらにその上にはギザギザ形の線刻文様が施された冠板が載せられている。

身廊部第2ベイの南北には大きなセグメンタルアーチを介して17世紀の礼拝室が作られている。ともに天井は円筒形ヴォールトで、外側の壁に隅切りされた半円頭形の窓が2つつ開けられている。北側の礼拝室には接続する聖具室への出入口が開けられている。この南北の礼拝室によって、サン＝テティエンヌ教会全体の平面プランはギリシア十字形となっている。

19世紀に再建された内陣および後陣は白く上塗りされていてまったく新しい。東西幅の狭い内陣は、北側に聖具室への扉が付けられ、天井は4分交差リブ・ヴォールトである。後陣は外部においては五角形なのであるが、内部は3面からなる。19世紀のものではあるが、外部と内部で形が異なるこのような形は珍しいと言える。内部の3つの面には隅切りされた半円頭形の大きな窓が開けられている。天井は交差リブ・ヴォールトである。

先にも触れたように、コンクールのサン＝テティエンヌ教会は、19世紀になって大幅に改築され、内陣と後陣が古いロマネスク期のものにかえて新しいものに建て替えられてしまった。当時はさまざまな事情があったのであろうが、結果的には極めて残念なことであったと言わざるを得ない。だがしかしこの聖堂を東（後陣側）から見ると、セヴェンヌの山並みを背景に楕形鐘楼とゴシック的な小聖堂がきれいにまとめられており、それはそれでまた趣のある美しい光景であるとも言えよう。

Bibliographie :

Buholzer (1962) pp.134-135; Clément (1993) p.174; Germer-Durand (1868) p.64; Goiffon (1881) p.101.



30.4.31 Saint-Étienne de Concoules

略記号と参考文献

各聖堂のビブリオグラフィーでは、和書、翻訳書、欧文文献（ファーストネームは略）、GVとRIP、Web-site（WS）の順に記した。

BSRL : *Bilan Scientifique Régional Languedoc-Roussillon*.

CAF : *Congrès Archéologique de France*. Paris, Société Française d'Archéologie.

CAG : *Carte Archéologique de la Gaul*. Paris, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres.

CSAF : *Cahier de la Sauvegarde de l'Art Français*.

GV : Guide de Visite.

RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

Aspord, Sophie (2000) : « Le castrum d'Allègre », in *CAF (1999, Gard)* , pp.101-124.

————— (2001) : « Allègre-les-Fumades, Château d'Allègre », in *BSRL*, 2000, pp.66-68.

Aspord-Mercier, Sophie (2006) : « Vivre dans une coseigneurie, le château d'Allègre (XIIème-XVème siècles) », in *Archéologies gardoises*, no.3, Conseil général du Gard, pp.49-57.

Auguste, Vidal (1929) : « Le prieuré de Bonnevaux, ses fiefs, la noblesse de la région », in *Annales du Midi*, tome 41, pp.113-167.

Bardy, Benjamin, et al. (1966) : *Dictionnaire des Églises de France, IIc, Cévennes-Languedoc Roussillon*, Paris, Robert Laffont.

Buholzer, Jean-François (1962) : « Notes sur quelques églises romanes du Gard », in *Annales du Midi*, tome 74, no.58, pp.121-137.

Clément, Pierre Albert (1993) : *Églises Romanes oubliées du Bas Languedoc*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.

Devic, Claude et Vaissète, Joseph (1875) : *Histoire générale de Languedoc*, tome V, Toulouse, Éditions Privat.

Dumas, Marie-Lucy (2007) : *Bonnevaux, grandeur, déclin et renouveau*, Bonnevaux, Comité des fêtes de Bonnevaux.

————— (2009) : *Aujac, entre route et Cèze, Gens et terroirs en Hautes Cévennes*, Pontetils-et-Brésis.

Gaussin, Pierre-Roger (1988) : « Les communautés féminines dans l'espace languedocien de la fin du XIe à la fin du XIVe siècle », in *La femme dans la vie religieuse du Languedoc*, Cahiers de Fanjeaux, no.23, Toulouse, Éditions Privat, pp.299-332.

Germer-Durand, Eugène (1868) : *Dictionnaire topographique du département du Gard*, Paris.

Goiffon, Etienne (1874) : *Notice historique sur la paroisse de Saint-Géniès-en-Malgoirès*, Nîmes.

————— (1881) : *Dictionnaire topographique, statistique et historique du diocèse de Nîmes*, Nîmes.

————— (1916) : *Monographies paroissiales. Paroisses de l'archiprêtré d'Alais*, Nîmes.

Haspel, Lionel (2010) : « Vivre dans une coseigneurie, le château d'Allègre (XII-XVèmes siècles) », in *Journal de l'Association du Château d'Allègre*, pp.7-10.

Moreau, Marthe (1988) : *L'âge d'or des religieuses : Monastères féminins du Languedoc*

méditerranéen au moyen âge, Presses du Languedoc.

————— (1997) : *Les châteaux du Gard du moyen âge à la Révolution*, Montpellier,
Les Presses du Languedoc.

Werth, François (2013) : *Le patrimoine caché et méconnu en Languedoc-Roussillon*,
Aix-en-Provence, Ouest-France.

Web-site

« Base Mérimée (Église Saint-Martin de Rousson) »

<https://pop.culture.gouv.fr/notice/merimee/PA00103189> (2024.10.20 アクセス)

« Base Mérimée (Église de Peyremale) »

<https://pop.culture.gouv.fr/notice/merimee/PA00103156> (2024.11.20 アクセス)

« Courry-Clapas, L'Église de Courry (Gard) par Christian Talon»

<http://courry-clapas.over-blog.com/2021/11/27-eglise-de-courry-gard-1er-partie.html>
(2024.12.1 アクセス)

« POP : la plateforme ouverte du patrimoine (Église de Courry) »

http://www2.culture.gouv.fr/Wave/image/merimee/PROT/PA00103051_DOC.pdf
(2024.12.1 アクセス)

« Site officiel de la mairie de Rousson »

<https://www.mairie-rousson.com> (2024.10.25 アクセス)

« Site officiel de Saint-Jean-de-Maruéjols-et-Avéjan »

<http://www.saint-jean-de-maruejols-et-avejan.fr/> (2014.11.1 アクセス)

« Site officiel du Château de Rousson »

<https://www.chateau-rousson.com/histoires-de-chateaux/index.html>
(2024.10.25 アクセス)

« Site officiel de la mairie de Saint-Privat-des-Vieux »

<http://www.ville-st-privat-des-vieux.com/Histoire.html> (2014.1.8 アクセス)